
技を極めし者なり

ベルム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

技を極めし者なり

【Zコード】

Z8807W

【作者名】

ベルム

【あらすじ】

21XX年。人類はオンラインゲーム時代を迎えた。これはその中で起きた事故により、別世界に飛ばされてしまった一人の少年（青年）のお話である。

始まり（前書き）

どうも

最近テストと補修と風邪で忙しいベルムです。

こんなん書いてんだつたら速くあつち更新しろ
と思った方。

最近私は

書こうと思つてこざ書き始めるとアイディアが消える
と言つ不思議現象に頭を悩ませています。

授業中は湯水に如く沸いてくるの・・・。

今やこの名前を知らないものはほとんどいない。

世界は21XX年。

人類は新たな困難を乗り越え、また新たな技術を確立させた。

バーチャルリアリティシステム

（これはとばしてもいいお）

バーチャルリアリティは、コンピュータなどによつて作り出された世界をコンピュータグラフィックスなどを利用してコーディに提示するものと、現実の世界を何らかの方法で取得し、これをオフラインで記録するか、オンラインでコーディに提示するものとに大別される。後者は、とくにコーディが遠隔地にいる場合、空間共有が必要となり、テレイグジスタンス、テレプレゼンス（en·Telepresence）、テレイマージョン（en·Teleimmersion）と呼ばれる。また、コーディが直接知覚できる現実世界の対象物に対して、コンピュータがさらに情報を附加・提示するような場合には、拡張現実や複合現実（en·Mixed reality）と呼ばれる。現実と区別できないほど進化した状態を表す概念として、シミュレーテッドリアリティ（Simulated reality）があるが、これはSFや文学などの中

で用いられる用語である。

バーチャルリアリティは、3次元の空間性、実時間の相互作用性、自己投射性の三要素を伴う。インタフェースは通常、視覚および聴覚を利用するが、触覚、力覚、前庭感覚など、多様なインタフェース（マルチモーダル・インターフェース）を利用する。

1968年にユタ大学の アイバン・サザランド によって HMD（ヘッドマウントディスプレイ、頭部搭載型ディスプレイ）が提案されたものが最初のバーチャルリアリティであるとされる。視覚のバーチャルリアリティとしては、1991年にイリノイ大学の Thomas DeFanti らによつて提案された CAVE (en: Cave Automatic Virtual Environment、没入型の投影ディスプレイ) が有名である。（出典：Wikipedia）

その技術が数年前から大型オンラインゲームに導入された。ネットゲーマーは今までにない感覚に衝撃を受け涙した。だがその衝撃はネットゲーマーではない人、つまり一般ピーポーにも衝撃を与えた。

そして、世界は

今までに類を見ない

オンラインゲーム時代を迎えた・・・

これは、そのゲームのひとつである『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』をプレイしていた一人の少年の物語である。

始まり（後書き）

批判は誤字以外受け付けません。

その他はイヤーデス。

ゲーム紹介（前書き）

どもっ

今日もグダグダ更新行きます。

ゲーム紹介

この

『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』

には三つの要素がある。

まず一つ目。

・さまざまな種類の種族と職業

このゲームではキャラクターメイキングのとき

人間、亜人、獣人、エルフ、ハイエルフ、ダークエルフ、精霊、吸血鬼、悪魔、魔人、魔神、天使、墮天使、巨人、魚人、妖怪、ゴーストなど全17種の種族を選べることができる。

種族にはそれぞれ能力が違つており、

たとえば人間だつたら特に目立つたものはないが平均的な能力。

獣人だつたら物理攻撃力が高いが魔法攻撃力が低い。

エルフだつたら逆に魔法攻撃力が高く物理防御力が低い。

魔人だつたらほぼ全ての能力が最高レベルだが、運がとにかく悪い。

魔神はこれの強化版。

大体こんな感じだ。

その後

サー・ヴァ・ント、ガーディアン、アサシン、侍、忍者、バーサーカー、ファイター、シルフ、アーチャー、ランサー、セイバー、ガンナー、マジシャン、アルケミスト、ネクロマンサー、ティマー、サモナー、死神、使徒、ボンバー、レスキュー、エクソシスト、神など全22種+の職業からはじめは一種類、LVが100増えるごとにさらに一種類最高レベルまで達して8種類が選べる。

しかし、死神はLV500、使徒はLV600、神はLV700にならないと選ぶことができない。

さらに、規定のレベルまで上げた後、職業クエストを受けると中級職、上級職、最上級職まであげることができる。

たとえばサー・バントだつたら中級職に傭兵、片手剣士、双剣士、レンジャーなどがある。

侍だつたら上級職に上級武士、剛・浪人、新・歌舞伎者、刃・侠士、革・宣教師、派・仏教徒、豪剣、師範代などがある。

まあ、全部挙げるとすればもう限がない。

次に一つ目。

-自由度が高い戦闘アクション -

このゲームでは他のゲームとは違いほぼ『全て』がプレイヤーの行動で実行される。

戦闘然り、剥ぎ取り然り、採集然り、鍛冶然り、etc……。

戦闘では基礎能力もあるが、基本プレイヤーの技能で優劣が決まる。だが、基礎能力が高ければ高いほど、スキルが多ければ多いほど、自由度が高まる。

無論、プレイヤー本人の身体能力もこのゲームには反映されるが、LV1でできることはせいぜい50cmほど跳ぶことができるぐらいだ。

だが、LV100のプレイヤーが軽く跳ぶだけで5m跳べる。
そして何よりこれには

『触覚』『嗅覚』『味覚』『視覚』『聴覚』『第六感』

の五感 + のうち『味覚』以外全て感じられる。
剣や槍、剣銃や弓を握っていると言つ『触覚』
臭いをかぐことで感じることができる『嗅覚』
人の情報の8割を占めているという『視覚』
目に見えないものモノを感じられる『聴覚』
漠然とした気配や危険を感じられる『第六感』

これも今までのゲームには見られない。

最後に三つ目。

・多種多様なスキル・

このゲームではプレイヤーの技能でほとんど決まるが、スキルの強さでその技能を上回ることができる。

たとえば「LV5のプレイヤーとLV10のプレイヤーがいたとします。

LV5でLV5のプレイヤーはLV10の初級スキル『スラッシュ』を覚えており、LV10のプレイヤーは何も覚えていないとする。

身体能力は2人とも同じものとする。

この条件下でLV5の戦いをするとギリギリではあるがLV5のほうが勝つ。

つまり、スキルを極めれば「おれトロロロロロロロロ...」もできると言つわけだ。

初級スキルはLV1000まで

中級スキルはLV500まで

上級スキルはLV100まで

最上級スキルはLV50まで

鍛えることができる。

鍛冶スキル、薬剤スキルもこの中に含まれる。

まあ、いろいろと突つ込みたいところがあると思つが

大体はこんな感じだ。

以上紹介終わり

ゲーム紹介（後書き）

批判は受け付けん！

誤字だけは別よろ～

SKILL MAX!! (前書き)

テストがやばい気がする今日この頃

SKILL MAX!!

とある森林

「こ」は『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』のアドベンチャーフィールドの中でも
カンストプレイヤー「」用達のマップだ。

その森林の中で今日も戦闘の音が鳴り響いている。

Side・ベルム

「あつと少し、あつと少し」

おっす！

今日も今日とてスキルを上げている超重廃人プレイヤー「」とベルムだ。

実はもう少しでスキルレベルがMAXになる。

・・・え？

そんなこと誰も聞いてないって？

まあまあ。

そこはとりあえず抑えて。

本名は白郷 久信だ。

何か武将の名前っぽくって俺は「」の名前が好きだ。
名づけてくれた親には感謝が耐えない。

つとと。

話がそれたな。

そうそうスキルのことね。

俺は8種類の職業の内、7種類の職業スキルと一般スキルをMAXまで上げた。

この半年間毎日飽きずに良くやつてこれたものだと自分でも感心（呆れ）している。

このスキル。

半年で7種類の職業スキルと一般スキルをMAXまであげたと簡単に言つたが

実際、そんなことができるのはたぶん俺だけだと思つ。

スキルを上げる方法はいたつて簡単。

一回技を放つことにより、1経験値たまる。

LV2になるのに20

LV3になるのに30

と、LVが1上がるごとに必要になる経験値が10増える。

だから普通1つの職業スキルをMAXにするだけでも良くて半年、最悪4分の3年かかる。

じゃあ、何で俺がこんなに早くスキルをあげることができたかつて？
それは、俺が序盤でスキル経験値 + 装備やスキル経験値 × 装備を運よく獲得することができたからである。

はじめは初級の中の中級モンスターを倒したことでスキル経験値 +

3 装備を手に入れた。

その後に友達からスキル経験値 + 2 装備を『もつと良いの手に入つたから』と言われ、譲り受けた。

その後、初級の中の最終ボス一步手前に出てくる上級モンスターを倒してスキル経験値 × 5 装備を手に入れた。

最後に始めて課金したときに『最高級ガチャ』と言つものをまわしてスキル経験値 × 20 装備を手に入れた。

このときはさすに俺でも自分の目を疑つた。

あの時は目をこすり過ぎて、軽く炎症を起こした。

一回のスキル使用で 500 経験値。

50 Lv までは一回使用するだけで Lv Up する。

まあ、経験値は繰り越しられるから一気に Lv 2 とか 3 とか上がるときも多々あつたがな。

ただ、これだけだったらまだ『お前メッチャ運いいなー』ぐらいで済ませる・・・と思つ。

俺の場合はこれにさらに経験値 × 装備も追加だ。

まず皆中級職になつてから始めての職業クエストでもらえる経験値 × 2 装備。

その後初級の上級モンスターを倒して手に入れた経験値 × 5 装備。なぜかいベントでもらえた経験値 × 8 装備。

乗りで行つた上級ダンジョンで見つけた経験値 × 10 装備。

もうこん時は笑いが止まらなかつた。（ありえない的な意味で）

まあ、そん時は周りに誰もいなかつたからよかつたけど、冷静に考

えたら明らかに変な人だったよな、俺。

1経験値で800経験値獲得。

雑魚モンスターでも最低100は獲得できるのでもう経験値ガッポ
ガッポ。

面白いくらいに速くしゃがあがつた。

4ヶ月でカンストしてしまったのは記憶に新しい。

そして、ついに今、スキルのほうもA～MAXにならうとして
いる。

「これで、終わり、だつ！」

そして、今俺の頭上に天使が舞つた。

『おめでとうござります！貴方はこの世界で始めてすべてのスキル
しゃをMAXにしました！よって、貴方には隠し職業【創造者】を
贈呈します！本当におめでとうござります！』

・・・え？

またスキル上げなきやアカンの？

批判は受け付けません

誤字の場合だけ受け付けます。

・・・これ、3回目だな

まあ、テキトーに読んでください。

チートな職業を手に入れた（前書き）

「つまつま

チートな職業を手に入れた

Side・ベルム

【創造者】クリエイター

……つこせつを手に入れた職業だ。

半年間このゲームをやっているが、そんな職業見たことも聞いたこともない。まあ、隠し職業って言つてから当たり前かもしないが。

と、ここでの職業を軽く紹介しよう。

「つくり」の職業は武器や薬品の元となるもの、つまり鉱石やら薬草やらその他もろもろのものを作ることも造ることも創ることもできるらしい。

ここでも考えてみよう。

作る・・・『作る』とは、一般に「つくり」の小規模なものを作ることだ。たとえば小学校のときにやつた工作。あれもこの中に含まれる。『車』や『船』といった大規模な物は『作る』ではなく『造る』に分類される。

創る・・・一方『創る』とは、上記であげた『作る』や『造る』とちがつて、新しく何かを創る、つまり自分の思い描いたものを造ることだ。たとえば、神話などで『空』やら『大地』を『創つた』と記されている。要するに、未知の領域を『創造』することだ。

改めて今回手に入れた職業を見てみよう。

【創造者】
クリエイター

・・・創造？マジで？

・・・コホン。
と、とりあえず能力の紹介をしよう。

だ、だれだ！いま『逃げたな』つていつたやつ！出でこいや！
だつて逃げるしかないじゃん！こんな名前からして反則臭がふんふんする職業を手に入れちゃつたらさあー！

ま、まず紹介・・・はさつきそれっぽい」と全部言つたやつたしま
あいつか。

じゃあ、スキルだな。

鉱石創造	1 / 100
薬草創造	1 / 100
宝石創造	1 / 100

ここまでが初級スキルだ。

・・・あれ？初級つて1000までじゃなかつたっけ？と思つた人。

しうがないじゃん！最初のスキルがこの三つだつたんだからさあ！
俺も見てびっくりしたよ！これだつたらすぐあがんじゃん！

じゃ、じゃあ次だな

剣術系スキル創造	1 / 50
----------	--------

槍術系スキル創造	1 / 50
----------	--------

格闘系スキル創造	1 / 50
----------	--------

弓術系スキル創造	1 / 50
爆弾系スキル創造	1 / 50
盜賊系スキル創造	1 / 50
防衛系スキル創造	1 / 50
銃術系スキル創造	1 / 50
暗殺系スキル創造	1 / 50
魔法系スキル創造	1 / 50
死術系スキル創造	1 / 50
錬金系スキル創造	1 / 50
召喚系スキル創造	1 / 50
神聖系スキル創造	1 / 50

・・・あれ？

職業関連あらかたあんじやね？

うつわなにこれ。もうここまできたら何も言つまい、うん。

・・・これ全部最大まであげたらどうなんだろう？

よし、幸いMAXLV1000はないからたぶん1~2日あつたら
楽にあがるだろ。
HPもMPも体力も気力も神力も靈力もやばいくらいある。もうホ
ントに。

ドンくらいかつて?

名前:ベルム

HP:5387290

MP:5671340

体力:

気力:

神力：

靈力：2982310

こんくらい・・・。

チートな職業を手に入れた（後書き）

やつすぎ？

いまさらですね

そんなこと

力とは？（前書き）

今日の午後
カラオケに行つてまいりますw

力とは？

とある郊外

職業の詳細を確認した日から2日経つた。一応後神聖系スキル創造をMAXにすれば全スキルMAXにことができる。

最初はこの～系スキルってどうやってあげていいか分からなかつた。そのときは『既存のスキルにはない技を使えばいいのかな』と思つていた。

果たして結果はその通りだつた。

たとえば剣術系スキル。

主なスキルは『スラッシュ』『連續切り』『フェイント』がある。このスキルは気力消費も少なく、初心者は大変重宝するスキルである。

そりいえば、スキル発動の条件を言つてなかつたな。

・・・べ、別に忘れてたわけじゃないんだからねつ！

・・・おえ。

やつて2秒で後悔した。2秒も持つた自分を誉めてやりたい。むしろ誉めて！

・・・話がそれたな。

で、発動の条件だったよな。

発動には主に4種類の方法がある。

1・『気力での発動』

主に剣術系スキルや槍術系スキル、格闘系スキルを発動するときに必要になる『気力』を使ったスキル発動。

『気力』はプレイヤーのヤル気や意志の強さ、身体の強さによって総量が上がる。つまり、LV10のヘタレより、LV1の死ぬ覚悟があるやつのほうが『気力』の総量が多い。

で、この『氣力』といつやつには2つ種類がある。

1つ目。

主に『内氣』と言われるやつだ。

これはさつき説明した通り、ヤル氣や意志の強さ、身体の強さによつて決まる『氣力』だ。自然回復である程度速度で回復することが可能。

2つ目。

主に『外氣』と言われるやつだ。

これはプレイヤーの強さに関係なく、フィールドの『自然』エネルギー総量で決まってくる。

『外氣』はそのフィールドの中にある『自然』エネルギーを『氣力』に変換し、その変換した『氣力』を取り込みスキルを発動させる。だから、取り込んだ『自然』エネルギーの総量によって『本来の威力以上の攻撃力になつた』と言つのもざらにある。

つまり何がいいいかと言つと、いくらヤル氣や意志がなくても、この『外氣』の運用に長けていたら十分補えるくらい厄介なものなのだ。つか、お釣り来る。

だが、この『外氣』を使うにはかなりの技力が必要なようで、今まで見てきた中でも運用に長けていた人は一人しか知らない。失敗したら逆に『内氣』を取り込もうとしたぶん失つてしまふので、慎重にならざるをえないからな。

つつても、『外氣』を使えるのは獣人を選択したプレイヤーや上

級職に達している一部のプレイヤーだけだけね。

2・『MP（マジックポイント＝魔力）での発動

これはどのオンラインゲームでも使われている『MP』を使ったスキルの発動だ。

この世界では、主にマジシャンやアルケミスト、サモナーといわれる職業が使用する。

マジシャンは五大元素のほかにヒールやエンチャントの使用のとき、アルケミストは物質の交換や昇格、精錬のときに、サモナーは召喚のときに使用する。

まあ、オンラインゲームを知っていると大体のことはわかる。もちろん自然回復もある。

ちなみにこの世界の最上級魔法の中で一番食らうMP消費量が58000。

余談だが俺の1秒間の『MP』の回復量は72000だ。

・・・ニヤニ。

3・『靈力での発動』

『靈力』はネクロマンサーや死神のスキルを使いつときに必要になる。

それ以外はほとんど使用しない代物である。
なので戦士職は基本この値は0だ。

『靈力』はとても使いどころが難しいものだ。総量が少ないのでもちろんのこと、スキル発動時の消費量が多い、自然回復しないなど、玄人向けの力であることが窺える。

『靈力』を回復するには一般スキル『瞑想』をする必要があり、瞑想中は戦闘や回復などができなくなる。つまり、無防備になる。敵さんの目の前でしたひにやー、攻撃してください、って言つてるもんだ。

だが、その分一発の効果が恐ろしい。相手の行動を一時的に封印したり、アイテムの使用を不可能にしたり、『呪い』をかけてHPやMPを削りつづけたり・・・。

ハイリスクハイリターンのこの職業は最初こそ人気なかつたが、団体戦において驚異的な戦闘力を誇る。なんせ、一度にフィールドにいる相手プレイヤーHPやMPをガリガリ削りまくることができる。そのせいか『1ギルド10ネクロマンサー』って言葉もできた。まあ、それを広めたのは俺なんだがな。

4・『神力での発動』

これは主に執行人主任（エクソシストの最上級職業）や使徒、神など聖職業の中でも上位に位置するものしか使えない。

この『神力』も『靈力』同様、自然回復しない。しかも、フィールドで回復することができず、町に戻つていちいち教会に行かなければならぬ。

その分威力は『靈力』を使ったときよりもすごい。もとい酷い。

一度試したがLV550のモンスター15体に神の広範囲中級スキル『神の啓示』LV300を使つたら、1発で全滅した。

あのときは開いた口がふさがらなかつたね。

だつて中級だぜ？しかも、広範囲攻撃仕様……。もはやバグだね。

もちろんドロップしたアイテムは格安で他のプレイヤーに売った。

その光景を見ていたほかのプレイヤーが『神がいるぞー！』とか騒いでいたが俺は気にせずその場を後にした。

だつて俺、職業、神だし。

力とは？（後書き）

アルチエミストではなくアルケミストにしたのはなんとなくです。

間違いではありません。

チート万歳・・・なわけある！（前書き）

あるんかい！

チート万歳・・・なわけある！

そういうえば、前回創造者のスキルの上げ方の説明をしていなかつたな。

前回も言つたように『既存にないスキル』を使ってすぎる」をあげるようになつていてる。

剣士系スキルであつたら『連續切り』や『スラッシュ』はあるが『十字切り』や『真空切り』という技はない。

そこで、スキル画面を開いて剣術系スキル創造にカーソルを合わせてみる。もちろん視線で。

『技名を入力してください』

と、ログが出る。

そこでわざわざ『既存にないスキル』の名前を入力する。

『【十字切り】でよろしいですか？』

Yes.

『かしこまりました』

これで設定完了。あとは、この技名を言いながら技を放つだけ。そうすれば一回放つごとにスキル経験値がたまっていく。

だが、この『～系スキル創造』と言つのは「～10」に新しい技を考え、発動しなければならない。

だから、スキル～をMAXにあげるには最低でも10個新しい技を考えなければならない。これには結構苦労すると思ったが、意外も意外。結構すんなり出てきた。

・・・俺、まだ中一治つてないのかなあ。

まあ、治る気もさうもないけどな！

あ、なんか中一病を嫌つてる人が高一病で、「中一病嫌つてる高一病つてみつともないよな」と思つのが大一病らしい。

中一（中学のだよ！決して病気ではない）のとき初めて知つた。

つとと、話は戻すけど。

この技考えるの。これが結構楽しくてね～。こう「ヒターナルフォースブリザード～」とかネタでやりたいわけよ。したら、「あ～こんなネタもやってみたいな」とか考へ出して、ポンポン出たわけだ。

おっヒ、危ない。

いま俺戦闘中だった。相手はLV750のヴァンパイア（プレイヤーにあらず）。俺はすかさず神聖系スキル創造で創った『光の雨』を使って反撃に出る。効果は抜群だ！

説明しよう。

『光の雨』とは、その名の通り『光』の『雨』を降らせるのこと。ただ、降らせるのは『雨』ではなく『剣』や『槍』などの武器だが。

閑話休題

だが、敵も最上級中級モンスター。一発では3分の1も減らない。だが俺は懲りずに連続で唱え……ない！

なぜか？

それはね…………

…………

A grid of 100 black dots arranged in a 10x10 pattern. The dots are evenly spaced in a rectangular grid, with 10 dots in each row and 10 rows in total.

・・・俺が無詠唱で魔法を使えるからだ！

何か知らんがマジシャンの最上級職業『スペルマスター』のスキル『詠唱時間短縮』をMAXまであげたらいつの間にかスキル『無詠唱』になっていた。それとなぜか『二重詠唱』も追加されていた。

ついでっぽく言つたが『二重詠唱』とは、まじしく『反則』級のスキルである。ただでさえ高レベルスキルMAXはもはや無敵と言えるのに、そこに『二重詠唱』が加わる。

考えてみて欲しい。学校の席替えで嫌いなやつが隣になるだけでなく、前後も嫌いなやつになるという絶望。しかもそれが3ヶ月ほど続く。・・・。

わかつていただけただろつか？

え？

わからにくいつて？

まあ、なんとなく分かればいいんだよ。

ほらあれだ。自転車のサドルに蜘蛛が乗っていたときの絶望感だ。

あの時は母さんに速攻で潰してもらつたね。だつて虫嫌いだし。

閑話休題・・・本日一回目。

そつこえればスキルMAXになつたらどうなるか言つてなかつたな。

ダメだ。この『ひ忘れものが酷い。

ま、まあ、気を取り直して。

スキルMAXにすると『LV1のときの力などの消費量で『やめやめなLVのときのスキル』を発動することができる。

たとえばマジシャンの初級スキル『ファイア』のLV1の消費MPは15で攻撃力は25～30だ。このLV500のMP消費は515で攻撃力は525～530だ。このスキルLVをMAXまであげた場合、消費MPは15のままでLV500の攻撃力、つまり525～530ダメージを敵に与えることができる。初めて知ったときは1分ぐらいフリーズしていた。もちろんアドベンチャーフィールドでそんなことをしていたらザコモンスターに体力をガリガリ削られる（つつても最高150ぐらい）わけで。何とか持ち直して敵を殲滅したし大いにござります。

あ、神聖系スキル創造LVMAXになった。

『おめでとうございます！創造者スキルをすべてMAXにした貴方に
にはこれを贈呈します！』

アイテム

神の涙（ アイテム）

神の国への通行書（ アイテム）

創造主認定書

武器・防具

フレイの聖剣 +10

（物攻：3000000 腕力：820 防備：640 耐久値0/

0）

オーディンの真槍 +10

（物攻：2800000 腕力：760 防備：700 耐久値0/

0）

エヌルタの戦手甲 +10

（物攻：2900000 腕力：950 俊敏：510 耐久値0/

0）

イムホテプ の魔杖 +10

（魔攻：2500000 知恵：750 防備：710 耐久値0/

0）

タナトスの死鎌 +10
(物攻 : 2700000 魔攻 : 1500000 俊敏 : 920 耐久
値 0 / 0)

オメテオトルの王冠 +10
(知恵 : 800 防備 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

アトウムの鎧 +10

(防備 : 800 俊敏 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

アイテールの肩当 +10

(防備 : 800 全耐性 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

ブラフマーの手袋 +10

(腕力 : 800 防備 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

フラカンの脚鎧 +10

(防備 : 800 俊敏 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

ソロモンの指輪 +10

(魔攻 : 200000 知恵 : 800 スキル経験値 × 10)

アーサーの首飾り +10

(物攻 : 200000 腕力 : 800 スキル経験値 × 10)

ペラーヨの腕輪 +10

(魅力 : 30000 運 : 500 スキル経験値 × 10)

ネロの足飾り +10

(魅力 : 30000 運 : 500 スキル経験値 × 10)

・・・もう、
ゴールしてもいいよ
ね?

チート万歳・・・なわけあるー（後書き）

ふい

もつやりすぎたけど

こんなくらいしないと

無茶できないから

やつたつたぜ！

最強が最強になりました（前書き）

最強が最強？

最強が最強になりました

Side・ベルム

ども。

またまた皆のベルムさんがログインしましたよ。

昨日はあまりにも衝撃過ぎてあの状態のまんまいつの間にかログアウトして寝てた。まあ、いまは長期休暇（夏休み）中なんで、いつ寝たり起きたりしても大丈夫だからこんなことできるんだけどね。

宿題？そんなもの始まつて最初の一週間で終わらせたがな。あのゲームやつてる所為かわからんけど半年前から勉強がわかりすぎて逆に困ってる。特に魔法系職業育てるときはやばかった。何か、取り入れた情報をポンポン理解していつてるんだもん。あん時もフリーズしたね。おかげで怒られたけど。

閑話休題

その後そのまんまだつたアイテム、武器・防具を改めてみてみる。

アイテム

神の涙（ アイテム）

神の国への通行書（ アイテム）

創造主認定書

武器・防具

フレイの聖剣 +10

（物攻：3000000 腕力：820 防備：640 耐久値0/0）

オーディンの真槍 +10

（物攻：2800000 腕力：760 防備：700 耐久値0/0）

エヌルタの戦手甲 +10

（物攻：2900000 腕力：950 俊敏：510 耐久値0/0）

イムホテプ の魔杖 +10

（魔攻：2500000 知恵：750 防備：710 耐久値0/0）

タナトスの死鎌 +10

（物攻：2700000 魔攻：1500000 俊敏：920 耐久値0/0）

オメテオトルの王冠 +10

(知恵 : 800 防備 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

アトウムの鎧 + 10

(防備 : 800 俊敏 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

アイテールの肩当 + 10

(防備 : 800 全耐性 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

ブラフマーの手袋 + 10

(腕力 : 800 防備 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

フラカンの脚鎧 + 10

(防備 : 800 俊敏 : 800 運 : 700 経験値 × 10)

ソロモンの指輪 + 10

(魔攻 : 20000 知恵 : 800 スキル経験値 × 10)

アーサーの首飾り + 10

(物攻 : 20000 腕力 : 800 スキル経験値 × 10)

ペラードの腕輪 + 10

(魅力 : 3000 運 : 500 スキル経験値 × 10)

ネロの足飾り + 10

(魅力 : 3000 運 : 500 スキル経験値 × 10)

・・・改めてチート装備と言つことがわかつた。

だが、詳細がいまいち漠然としていてわからないから、コレコレのアイテム！

『オーディンの片目』 × 2

そう！

ミーミルの泉の水を飲んで、全知と魔術を手に入れたオーディン。しかし、その代償として片目を失ってしまう。

と言つのは有名な神話。

そしてこの『オーディンの片目』と言つのはその時代償になつた目だ。

このアイテムは『田』につけるアクセサリーだ。決して消耗品ではない。

能力は『モノの詳細を知ることができる』と『知恵・500』だ。

一応オーディンシリーズはすべてユニークアイテムとされており、一つのアイテムにつき10人持つていればいいほうだ。このアイテムのほかに『オーディンの槍』『オーディンの髭』『オーディンの神服』『オーディンのローブ』『オーディンの帽子』『オーディンの靴』などがある。

これは最上級最上級モンスターLV850ファンリルを倒したときに1000分の1の確立でドロップするアイテムだ。

まあ、俺は一応全部持っているがな。運とか全開だつたし。

と、いうわけで早速この田でアイテムを見てみましょう。

神の涙

詳細：HP・MP・体力・気力・神力・靈力すべて全回復する。死んだものも同様全快の状態で生き返る。状態異常なども治せる。

死

まさかの全快…もうこれで怖いもの無しだね！

つて思つたけどダメじやネこれ？こんなのは卑怯過ぎてつかえんわ。

これまで封印。・・・よし。このアイテムはポンティアックの車に使われる。

それ、封印倉庫にマル投げジャーア。

封印倉庫

スペルマスター（マジシャンの最上級職業）のスキルをMAXにしたときに覚えた亜空間攻撃を応用して使っている魔法。この倉庫のほかに消費アイテム・武器・防具・食料・ドロップアイテム・クエストアイテム・創造アイテムなど専用の倉庫がある。倉庫のほかにも、鍛冶倉・調合室・飼育室などといったものもある。

はいじゃあ次

詳細：新しく増える特殊フィールド『ヴァルハラ』『ミズガルズ』『アースガルズ』『ヨトウンヘイム』『ヘルヘイム』『ニヴルヘイム』『ユグドラシル』への通行を許可するカード。

うん、まあそんなことだらうと思つたよ。『神の国つてどこだよ！』つて思つたけど冷静に考えたら『これは新しいフィールドのことなんじゃないか』つて普通に出たからね。まさか当たるなんて思つてなかつたんだけどね。

『ヴァルハラ』

ヴァルハラはグラズヘイムにあり、ヴァルキュリヤによつて選別された戦士の魂エインヘルヤルが集められる。レーラズの影が落ちるこの富殿には、540の扉、槍の壁、楯の屋根、鎧に覆われた長椅子があり、狼と鷲がうろついているという。これは、戦場の暗喩である。館の中では戦と饗宴が行われ、ラグナロクに備える。また、この館には雄鶏のグリンカムビ（黄金の鶏冠）が住んでいる。

『グリームニルの言葉』第8節には、次のような事が書かれている。

“ 黄金色に輝くヴァルハラが広々と建つてゐる第5の場所はグラズヘイムと呼ばれている。

フロプト（オーディンの別名）がそこで戦死者を選んでいる。西の扉の前に狼がぶら下がつていてその上空を鷲が飛んでいる。”

オーディンは狼のゲリとフレキおよびワタリガラスのフギンとムーンを従えて、この館の王座につくとされる。（出典：Wikimedia）

『ミズガルズ』

ミズガルズは、「中央の囲い」を意味する北欧神話に登場する人間の住む領域。

ミズガルズはユグドラシルの中央周辺にあると描かれており天上のアースガルズと地下のヘルヘイムに挟まれ、ミズガルズとアースガルズは虹の橋ビフレストによつてつながつてゐる。

ミズガルズの周囲は水または海洋で囲まれており、その外側にはヨトウンヘイムが存在する。巨大な蛇ヨルムンガンドはミズガルズに收まりきらず海洋の中でミズガルズをぐるりと取り囲んで、己の頭で己の尾をくわえている。

アースガルズ外側には魔的 existence が住むウートガルズがある。（出典：Wikimedia）

『アースガルズ』

アースガルズは北欧神話に登場するアース神族の王国。死すべき定めの人間の世界 ミズガルズの一部であるともいわれる。

アースガルズを囲む壁は巨人と巨人の所有する馬であるスヴァルフアリによつて建てられた。

地上からアースガルズに行くためには虹の橋ビフレストを渡る（『ギュルヴィたぶらかし』第13章）。ビフレストのそばにオリアースガルズの門番をつとめるのはヘイム达尔である（『ギュルヴィたぶらかし』第27章）。

また、アースガルズの中心にはイザヴェルと呼ばれる平原がある（『ギュルヴィたぶらかし』第14章）。アース神族は重要な問題や会議があるとそこに集う。

男性の神々が集まる館をグラズヘイム、そして、女性の神々が集まる館をヴィーンゴールヴと呼ぶ（『ギュルヴィたぶらかし』第14章）。

神々はまた毎日ビフレストを渡り、ユグドラシルの下に住むウルズと会う（『ギュルヴィたぶらかし』第15章）。（出典：Wikipe dia）

『ヨトウンヘイム』

ヨトウンヘイムは北欧神話に登場する「ヨトウン」と呼ばれる霜

の巨人族と丘の巨人族が住む国である。

『古エッダ』や『スノッリのエッダ』に散見される記述では、ヨトウンヘイムは東に位置するとされている。また、人々の住むミズガルズと神々の住むアースガルズの脅威となっている。ミズガルズとヨトウンヘイムの間にはイヴィング川が流れている。

主要都市としてはウートガルザ・ロキの治めるウートガルズがあり、ほかにメングラツドのすむガストロープニル、そしてスイアチの住むスリュムヘイムがある。ヨトウンヘイムを支配する王はスリュムといつ。

『古エッダ』の『巫女の予言』によれば、この国から「忌まわしき3人の巨人の娘」が来るまでは、神々は黄金でできたもので欠けた物はなかつたという。また、ラグナロクの到来時には、神々や妖精だけではなくヨトウンヘイム全土もどよめくという。

なお、ノルウェーにはスカンディナヴィア山脈に属するヨートウンハイメン山地が実在し、これはスカンディナヴィア半島でもっとも高い山であるガルフピッゲンを含んでいる。（出典・Wikipe dia）

『ヘルヘイム』

ヘルヘイムは、北欧神話に登場する世界のひとつで、ロキの娘・ヘルが治め、ユグドラシルの地下にあるといわれる死者の国。ニヴルヘイムと同一視される。

時に「ヘル」（『アルヴィースの言葉』第32節など）、「ニグルヘル」（『ヴァフルスルーズニルの言葉』第43節など）とも呼ばれる。（出典：Wikipe dia）

『ニグルヘイム』

ニグルヘイムは、北欧神話の九つの世界のうち、下層に存在するとされる冷たい氷の国。ギンヌンガガブと呼ばれる亀裂を挟んでムスペルヘイムの北方にある。ロキの娘ヘルが投げ込まれた場所であり、時にヘルヘイムと同一視される。

天地創造以前から存在し、ニグルヘイムには世界樹の根の一つが伸びているが、その下にはフヴェルゲルミルと呼ばれる泉がある。この泉には世界樹の根を齧るニドヘグという蛇が住み、フヴェルゲスヴォル、グンスラー、フィヨルム、フィンブルスル、スリーズ、フリーズ、シユルグ、ユルグ、ヴィーズ、レイプト、ギヨツルなど、の川の源とされているが、このうちギヨツルがニグルヘイムとヘルヘイムを隔てている。そこにはギャラルブルという黄金の橋が架かっており、モーズグズという女巨人が守っていると考えられていた。

また、ニグルヘイムにはエーリヴァーガルという川があり、凍りながら北のギンヌンガガブに至るとされている。（出典：Wikipe dia）

『ユグドラシル』

ユグドラシルは、北欧神話に登場する1本の架空の木。

世界を体现する巨大な木であり、アースガルズ、ミズガルズ、ウートガルズ、ヘルヘイムなどの九つの世界を内包する存在とされる。

三つの根が幹を支えている。『グリームニルの言葉』第31節によると、それぞれの下にヘルヘイム、霜の巨人、人間が住んでいる。また『ギュルヴィたぶらかし』での説明では、根はアースガルズ、霜の巨人の住む世界、ニヴルヘイムの上へと通じている。アースガルズに向かう根のすぐ下には神聖なウルズの泉があり、霜の巨人の元へ向かう根のすぐ下にはミーミルの泉がある。

この木に棲む栗鼠のラタトスクが各々の世界間に情報を伝えるメツセンジャーとなっている。木の頂きには一羽の鷲フレースヴェルグとされるが留まつており、その眼の間にヴェズルフェルニルと呼ばれる鷹が止まっているという。

ユグドラシルの根は、蛇のニーズヘッグによつて齧られている。また、ダーインとドヴァーリン、ドゥネイルとドゥラスロールという四頭の牡鹿がユグドラシルの樹皮を食料としている。また、『グリームニルの言葉』第25節によると、山羊のヘイズルーンがレーラズという樹木の葉を食料にしているとされるが、レーラズがユグドラシルと同じ樹木かははつきりしていない。（出典・Wikipe
dia）

わよつと詳しひ過ぎるがしないでもない。つか詳しひ過ぎ。

じや、次ひ言ひてみよつ・・・。

創造主認定書

詳細・創造者の最上級職業。もともと創造者は上級職業なので「これ以上上はない」。この職業になると、造れるものが伝説級から神・究極になる。それと身体「」の上限がなくなる。

・
・
・
もう俺疲れた。

最強が最強になりました（後書き）

ははは

Wikiaさんにはこつもお世話をなっています

い、いたま・・・！（眞面目）

今回も無茶やひがやこます

「、これは・・・！」

Side・ベルム

やあ、午前は装備説明の前半で力不足きたベルムだ。
せつせつまで飯食つてたわ。

「やー、せつぱ麻婆豆腐は最高だねー俺、卵とネギと豆腐とこん
にくじゅがいもと辛いもの好きだからこの料理には運命を感じる
ね。もう俺のためにある料理についても過言では・・・あるか。

え？

何でこんな暑い中そんな熱いものを食べるかって？（この世界では
いま夏休み）

そんなの・・・。

そんなの・・・。

そこに麻婆豆腐があるからだろ、つー！

・・・え？

なに『そこに山があるからだ』みたいなノリで言つてんのかつて？

いこじょん。ノコサイコー。

・・・コホン。

とまあ、「冗談（結構本気）はさておき。

俺ははつきり言つてもうアイテムの説明は要らないと想つ。

だつてあんな長たらしいう説明見なきや いけないんだぜ？お前らだつていやだろ？俺はいやだ。つか、はつきり言つて面倒。しかも疲れるしな。

え？

本音駄々漏れ？

俺は、ぶつちやけるときも、ぶつちやける男だ。あしからず。

とまあ、こんな理由だから説明はもうこいだろ。

よし。

じゃあ、改めてスキルを眺めてみるぜ。

スキル眺め中

あまりにも多いから省かせてもらひが。

いやー、こしてもよく俺全部MAXにできたよなー。

普通の人（スキル経験値×～持つてない人）だったら、間違いなく発狂する量だぜこりや。

まずひとつ職業の初級スキルが15個。

中級スキルが10個。

上級スキルが5個。

最上級スキルが3個。

これを全部足して8掛けたら264個になるからな。

平均1つのスキルMAXにするのに「×500分（12740回）の攻撃をしたとしたら全部MAXにするまで101920回スキルを繰り出さないといけない。

俺もこの装備なかつたら発狂していたな。

スキル眺め中

「あー、こんなのもあつたな」

「ああ、もうアリハツでフランリル」とどめをしたんだ

「ブツツー、あ、これエロくね？」

/

□

ふうだいたい見終わつた・・・な

・・・・・

?

な、なんだ・・・これは・・・?

ま、まず落ち着け俺。クールになれ。クールになるんだ。そうだ。
さつきお前麻婆豆腐食つただろ。そう、いい具合にからかった。ま
さに俺好みの辛さだつた。それに加えあのネギ(白髪ネギ)の歯ご
たえに豆腐の柔らかさ。極めつけはいい具合に炒めたひき肉。それ
が俺の口の中で混ざり、最高のハーモニーを奏でた。まさに至高の
一品。まあ、それを作つたのも俺なんだけどなつ!

・・・つて!

ぜんぜん冷静になつてねえじやねえええええかおれええええ
ええええええええええええええええええええええええええええ

くそつ！

これが噂に聞く『孔明の罠』ってやつか！（せんせん違います。）

なんて威力だ！この俺が陥落寸前までいたたぜ。

だがなあ、俺を倒すにはちょっとだけ威力が足りなかつたぜ。ちょっとだけな。（人差し指と親指の中を2cmぐらい広げて表現）

つと。

あぶねえ。危うく暴走しかけた。

で

てのもたぶんその名の通りのスキルなんだろ? な。せつかりいつてこれ使つたら最終鬼畜の人も全力で引くくらい鬼畜になりそうだな。まあ、ありがたく使わせてもらひけど。

ふつ、ここ最近疲れることがいっぱいあるぜ。

何かログインするたびに

『神になりたくありませんか?』

つて言つ声が聞こえるんだよ。まあ、なんかのバグだとおつもて俺は気にしてないけど、他のやつに聞いても『は? なんですかそれ?』つて返してくるし。(ベルムは『ANK 1位のギルマスで、皆に尊敬されているため基本敬語で会話)

まあいつかー

この後、この声の所為であんなことになると知らずに暢気なベルムであった。

「…これが…！」（後書き）

ふい

やつと始まりが見えてきた。

下書きも無しで、30分～1時間半で書くからどうしても内容が薄くなつてしまつた。

みてくれてるみんなへ

ホント「ぬるよ～

始まりはとても自然なもので（前書き）

できれば自然に異世界に生きたい

始まりはとてもとても自然なもので

Side・ベルム

やあ、今日も今日とてログインしているベルムだ。

昨日はあの後『多重詠唱』がどんなものか確認していた。

確認した結果

やはり『多重詠唱』はチートだった！

『多重詠唱』・・・その名のとおり魔法を幾重にも同時に発動することができるスキル。このときには、スキルを発動するための『魔力』と詠唱する時間が必要となる。このスキルは一度に発動するため普通にスキルを使った場合の2倍の『魔力』が必要になる。

『多重詠唱』の詳細はこんなところだ。

だが。

駄菓子菓子！

失礼。

だがしかし！

俺はものすごく膨大な『魔力』にスキル『無詠唱』を持っているから一瞬で何十何百もの魔法を展開することができる。

実際、昨日ふざけ半分遊び半分でやつて初級魔法百個ぐらい出して後悔したからな。

ま、まあ、過ったことはそれらへんに投げ捨てて。

今日はずみで力をあげてみようかと思う。もちろんあの装備で。

・・・これはすぐ力があがる予感。

中上位

・・・あの装備マジぱねえ。

マジパネエ！-！-！

あにあの「＼の上がる速度！マジ早めのつて！

フエンリル1匹倒しただけで「＼12上がった・・・。

まあ、あの装備手に入れる前に手に入れた装備（今まで使ってたやつ）もつけたまんまでやつたから、すぐ上がるのも当然か。

ちょっと計算してみよ。

$$\begin{aligned} & 10 \times 10 \times 10 \times 10 \times 10 \times 10 \times 8 \times 5 \times 2 \\ & = 1000000 \times 8 \times 10 \\ & = 80000000 \end{aligned}$$

8千万倍・・・。

やべえ、笑えネエ。

「れやつすがだ・・・。〇ん

まあ、自慢する気ないけどなつ！

ふう、今日はもう疲れた。

毎食食べてからまたログインしない。

今日の毎食はカレーだぜ！

暑ことに食べるカレーは最高だ！

暑ことに熱い（ ）

・・・あれ？これ前も言ったよつな？

まあ、いつか

それじゃあログアウトだ。

『ログアウトしますか?』

Y
e
s
.

『ログアウトします』

おつ
き

h
?

無事ログアウトできたようだ・・・な・・・?

『俺はあたりを見渡した!』

周りは木木木岩。

・・・は？

ここ・・・どこだ・・・？

ここから俺の新たな物語が始まる・・・かも・・・しれない・・・。

始まつたら・・・いいな・・・。

始まりはとてもとても自然なもので（後書き）

今日は短いな

いや、『も』か？

まあ、いつか

卷之三

なんかいつの間にか
10000P超えていたと言つホラー・・・。

おつがと「ア」れこまか

Side・ベルム

・・・やあ。

何がなんだか今の状況がいまいち理解できていないベルム・・・いや、ここは白郷 久信といったほうがいいのか？

ん、んんつ。

「」は定番のあれやるか？

あ、あいつのままこま起こつたことを話す、ぜー！

俺がそろそろログアウトして寝ようかなと思つてログアウトしたら、目の前が森だった！何が言いたいかわからない？俺もわからない！

・・・まあ、こんな感じだ。

俺も良い感じに混乱してるからちょっと待っててくれ。

・・・よし、いぐらか落ち着いたぞ。

まず、だ。この森。なんか見覚えある。

そうあれは俺がまだ つて、ここ 迷いの森 だ！

迷いの森

迷いの森 はこのゲーム 『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』 の中級ダンジョンの中で最も簡単とされるダンジョンだ。迷いの森 なんてたいそうな名前がついているが、決まつた道を進めば別に迷つたりしない。つか、まっすぐ突つ切ろうと思わない限り迷わない。この森は『直線切り抜け防止結界』が常時張られている。マジシャンの上級職に転職すれば、見ただけでわかる。

おおう。

懐かしいわけだ。

最後に入ったのが4ヶ月前だ。いや、もっと前かもしね。

とつあえず近くあった街で座ってあたりを見渡してみる。

・・・ふむ。

どうやら迷いは迷いの森の右端みたいだ。

何でわかったかって？

魔法スキルの中には『探査魔法』なるものがあるからな。

それに一応おれ自身が作ったメッシュ細かい地図持つてるし。

いまは倉庫の中に入ってるけど、取り出さないと困るばっかりでも取り出せる。

・・・まてよ？

冷静になつてみれば、俺ログアウトしたはずなのにここにいるのは何おかしくないか？

とつあえずログアウトできるか試してみるか。

・・・・・・・・・・・・・・

・・・できない。

まあ、薄々気づいていたからそんなに残念ではない。

じゃあ、ステータスウインドウは開けるか？

まあ、開けなくとも

名前 : ベルム

HP : 5387290

MP : 5671340

体力 :

運	魅力	全耐性	俊敏	防備	知恵	腕力	職業	靈力	神力	氣力
：2409+710	：1558+270	：1200+250	：2456+330	：2003+520	：1422+450	：1687+420	：心・武器に愛されし者 ：鋼・鉄壁要塞 ：殺・元祖アサシン ：スペルマスター ：理・自然の理解者 ：常識を超えし者 ：獄・断罪者 ：皇・大神 ：創造主	：2982310	：	：

所持金：47459173700 N e (474億5917万37
00ネルス)

まあ、いろいろ聞きたいことはあるだろ。

なんだその職業は

とか

なんだその基礎ステータスは

とか

所持金が何でそんなにあんだ

などなど

— おひるね言つておる。

俺は強いやつしか倒さない！

「おおむね（ひざ）が（後書き）」

はま

「このへりこなこと我慢できない自分はおかしい

といふべき

Side・ベルム

やあ、さつさステータス確認したベルムだ。

いま俺はまだ岩の上に座っている。

もうこの状況にはなれたな。ここはたぶんゲームの世界。でも、ログアウトできないことから、ここは『異世界』とかいわれるものかもしれない。ただ、気になることがひとつだけある。

それは

魔物がぜんぜん寄つてこないつ！

なんで！何でなんだ！

いるにはいるんだよ結構近くに。『探査魔法』使つてるからどうにこらか5km以内なら完璧に把握できる。いまもこちりをひりがひり

ら見ている魔物が3匹ほど。。。

「どうして寄つてこないっ！」

びっくつー？

・・・・・あ、逃げた。

俺そんなに近寄りがたいかな？これでも結構魔物には好かれるんだ
けどな。

え？

何でかつて？

それはね。

常に職業『理・自然の理解者』の能力が発動しているからなんだ。

職業『理・自然の理解者』

この職業は『サモナー』の最上級職業。ほぼ全てのモンスターを召喚し手なずけたものの証。そのため、常に魔物や妖精、植物に対して好まれる匂いを発している。ティマーの最上級職業『喜・生物愛護会会長』も同じ効果を得ることができる。

理解いただけただろうか？

まあそうだね。

こういう特殊能力は最上級職業全てにあるよ。

じゃあ、昨日の続きか？

まずステータス

靈力	神力	氣力	体力	MP	HP	名前	:
:	:	:	:	2982310	5387290	ベルム	

職業 : 心・武器に愛されし者

: 鋼・鉄壁要塞

: 殺・元祖アサシン

: スペルマスター

: 理・自然の理解者

: 常識を超えし者

: 獄・断罪者

: 皇・大神

: 創造主

腕力 : 1687 + 420

知恵 : 1422 + 450

防備 : 2003 + 520

俊敏 : 2456 + 330

全耐性 : 1200 + 250

魅力 : 1558 + 270

運 : 2409 + 710

所持金 : 47459173700
00ネルス)

N e (474億5917万37

まず名前はいはずもがなベルムだ。

次。

HP・MPもこの前説明したよな?

職業によって増える値は違うけど全ての職業を最上級職業にしたら
大体こんな感じになる。

体力とか気力とか神力は職業『皇・大神』を手に入れたらなんかな
つてた、とだけ言っておこう。

次。

職業についてだな。

一応俺の職業は

サーバント
ガーディアン
アサシン
マジシャン
サモナー

てなところかな。

アルケミスト	死神	神	創造者
ガーディアン	反射神経	鋼の身体	
アサシン	：隠密		
マジシャン	：詠唱		
サモナー	：体質		
アルケミスト	：対価		
死神	：即死		
神	：裁き		
創造者	：創造		

まあ、簡単に説明すると

まあ、またあとで暇だったら紹介するか。

特殊能力は・・・・めんどいからいいか。
の最上級職業だ。

次。

基礎ステータスについて。

これはさすがに俺以外こんな値にできたやつはないと思う。

まず俺は「LV800まで上げた。

この時点で半年でできたやつなんて俺だけだと想つ。

んで、ステータスUPアイテムを使いまくった。

ボス級を倒すと結構な確率で落とすから100個以上使ったかもしれません。

(と言つても、実際の確率は220分の1)

あと、強いやつを倒しました。

じつやうこのゲームには熟練度なるものがあるらしい、強いやつを倒せば倒すほど上がるらしい。まあ、実際フェンリルばっか倒していくらいつの間にか基礎ステータスが上がっていたなんてことは

そりあつた。

じゃあ、この+～～～ってやつはなんのかって言つと、これは防具の補正値だな。

ん?

何でこんなに少ないのかつて?

あの防具はどうしたつて?

ああ、いま俺は自分で作った装備を着ているからな。made it

n 俺 だ。

ちなみに全部+10だ。

何でそんなもの着てるかつて?

そりやお前、あんなモン着たまんまログアウトして、次ログインしたとき近くに他のプレイヤーがいたらどうなるか考えてみる。

まず間違いなくなんか言われるな。

俺はそれがいやでこんな装備にしている。

でもこれ結構動きやすいからお気に入りではある。

皮装備サイコー！

次。

お金について。

これはクエストとか高級素材とか自前の武器・防具を売ったからとしか答えられない。

基本ほとんど自分で作ってるから買つものがなかつたし、特に気にせず売つてたらいつの間にかこんな大金になつていた。俺もびっくりだ。

まだ、俺の素材倉庫に腐るほどいっぱいあるからこね売つたうどつなるか想像しなくても結果は見えてるな。

まあ、こんな感じだ。

さて、次は何をしようかね。

・・・つてまづは二つからでないとな。

とうあえず（後書き）

ふう

疲れたぜ

出れたか？・・・、いれなでトハハレ？（前輪轍）

トハハレトハハレ

出れたけど・・・これなんてテンプレー?

Side・ベルム

やあ、やっと森から出る」とができたベルムだ。

結構複雑な道だったから出るのに苦労したぜ。

まあ、体力とか何それおいしいの?状態だから精神的に疲れただけだって、肉体的にはぜんぜん疲れていない。むしろ良い具合に体動かしたから、さっきより調子良いくらいだ。

で、出れたことには素直に喜びたいところだが、出た先がなんもないだだっ広い荒野と言つのはいさか味気がない。せめて街道やら沼地ならまだワクワクできたことだろ?。魔物とか魔物とか魔物とか出でぐるから・・・。

「、」ホン。

過ぎたことは気にしない。それが俺のポリシー。

とこうことで、早速この近くに村でも良いから人が住んでるといふ
がないか探そうと思います。

さつき探査魔法使ったけど2km以内に人が集まってるといふはな
とそうだった。

なんで5kmじゃないかっていつのま、設定を間違えたからってこ
とにしておいてくれ。

決して魔物たちのせいではない。そこだけはあしからず。

んじゃ、『飛行魔法』使って上空から探ししますか。

「飛行 フライ！」

そういう瞬間、俺の体から何かが抜けすぐたまる感覚がする。
それと同時に *(at the same time)*、体が浮く感覚がする。

「あ、おおお。う、浮いてるーー！」

今まで何回も『飛行魔法』を使ったけど、それはあくまでもゲームの中で。現実？で使ったのは初めてだ。つか、普通現実で使えねーよ。

俺は本当は呪文をつぶやかなくても魔法は発動する。無詠唱あるからな。でもなんか最初の魔法ぐらい、詠唱したほうが良いかな、って思つてやつただけだ。別に他意はない。

探査魔法も魔法とつくからには魔法だが、あれは、魔法であつて魔法ではない。そう！断じて忘れていたわけではない！つか、探査魔法つかうときこそ呴くやつのはづがばあかだろ。まあ、マジシャンのスキルを極めていないやつは呴かないといけないんだけどね。

おお、氣づいたら結構高いところまで上がつてたな。たぶん、田測で500mはきたんじゃねーか？うん、こりゃそんくらいあるな。

「ああ、ああ、よく見えるぜ」

前方の遠いところ（12kmぐらい）に、大きな外壁がある町らしきものが一つ。そこに行くまでに小さな村らしきものが二つ（近いほうが2、3km遠いほうが6、7km）。

右は荒野、左も荒野。

後ろは森を抜けて、1、2kmところに村が一つと、そこからひとつと行ったところに街が一つ（5、6km）。

そしてすぐ下では、盗賊らしきものに轟車？が追いかかれている。

追いかかれている。

・・・追いかけられてるっ！？

おーおいおい！

なんだこのテンプレ臭！

明らかにおかしいでしょーこれー？

ああ、くそつ！

これはあれか？暗に助けるって言う神のお告げか？

・・・上等だぜ。やつてヤローじゃないのー！

S.i.d.e.?:?:?:?:?

「つぐー！」

いま私は賊に追いかけられている。今私が捕まつたら中にいるお嬢様は・・・つ！

私はラミリア・スファイル。リインハイド家筆頭メイド兼護衛だ。

リインハイド家には多大な恩があるので、恩をあだで返すつもりは毛頭ない。

しかし、他の護衛のものはいま違うところで足止めしている。あのもの達も、並みの賊ではかなわないくらい強いかア大丈夫だろ。

だが、いかせん、数が多過ぎた。

こちらの護衛は5人。

それに対して相手の数は50人ちょっと。

単純に考えてこちらの10倍はある。

今、私を追つてきているのは10人ちょっと。他の40人はたぶん足止めしてくれているのだろう。

20人はいないことがせめてもの救いか……。

「ラニア・・・

「つー?お、お嬢様!い、いけません!中に隠れていてください!」

「で、でも・・・」

「大丈夫です!お嬢様はたとえ私達がどうなると、必ず!旦那様の下にお送りします!」

そうだ。

私達がたとえどんなことになろうと、お嬢様だけは旦那様の下にお届けしなくてはいけない!

そう、たとえ死んだとしても。

「ひやつはあ！姉ちゃんそれもう諦めたりひつだ？」

「やうだぜ姉ちゃん！おとなしくその中にいる姉ちゃんを渡しな！」
「誰が貴様らみたいな下郎にお嬢様を渡すか！お嬢様には指一本
触れさせん！」

「つーこのアマーニとなしくしてればいい気になりやがつてーおい、
てめえらーーー気に攻めるぞーーー！」

『おおひー』

つーーー

ここまでか・・・。

だが私は最後まで諦めないー！

そんなことを考えてこらへんうちに賊Aは私に剣を振り上げ

「おおひー

「つーーー！」

私に向かって振り落とされた剣は容赦なく私の体を切り裂くはずだ

つ
た。

そ
う、
“
は
ず”
だ
つ
た。

風の防壁
フェーンブロック

賊Aの剣は何か見えない壁みたいなものに阻まれ、半ばから折れた。

「は？」

「え？」

私だけじゃなく賊Aも驚きのあまり固まっている。そんな中

「ふう、何とか間に合つたか？」

そんなどこか抜けたような、だが、優しい声が聞こえた。

出れたけど・・・これなんてテンプレー? (後書き)

英語を入れたのは

俺がいまテスト期間中で

ひとつでも熟語を覚えようと思ったから。

それとテンプレー。

護衛（前書き）

昨日の朝

同級生が死んだって電話来ました。

土曜日葬式行つてきます。

Side・ベルム

「ふう、何とか間に合つたか?」

やあ、今日も元気20%のベルムだ。

結構ギリギリのタイミングだったが、何とか防御魔法を発動することができた。一般的に、自分にしか使えないけど、『多重詠唱』を覚えたことによつてそちらへんが曖昧つづ一かなくなつた?のかな。

とにかく、田に見える範囲ならどこでも展開できるようになつていた。だから後ろから不意打ちとか、全方位集中砲火とかもできるよつになつた。はつきり言つてこれは反則だべ。

閑話休題

関係ない話は一ひり邊でやめて。

「大丈夫か?」

「えー？ あつ、 はい」

目立つた外傷もないし（つーか無傷）、 やりやけに合つたみたいだ。

これで間に合いませんでした、 とかだつたら寝覚めが悪いからな。つか、 こんなきれいな人に怪我負わせたらたぶん一生後悔するわ。んで、 賊は地獄行きつと。

「な、 なんだ兄ちゃん？！ どつからきやがつた！？」

「どつからつて・・・」

そう言つて俺は上を指しながら

「空」

「空？」

なんか、 きれいな人も賊もこっちを見て固まつていいがどうかしたのだろうか？ あくまで推測だが、 この世界は『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』とほぼ同じだと見ていいだろう。 だとしたら、 飛行魔法ぐらい日常的に使われているはずなんだが・・・。

「つははははあー-[冗談をついて]兄ちひやん!」

「[空飛ぶやつなんて見た]ことも聞いたこともねーぜ?」

「頭でも打つたか?」

「確かに見た」とはあつませんが……

・・・え?

も、もしかして俺ってイタイ子に見られてる?

・・・つかなんかここつらムカつくからもつ殺しちゃつていいよね？

S·P·e·・リミコア

「ふう、何とか間に合つたか？」

その声とともに私の前に黒髪黒田黒服の青年が現れた。一瞬その異様さに田を奪われた。

だが同時に、黒髪黒田に疑問を持つた。

この世界で一番多い髪の色が金。次に赤。

黒髪などほとんどいない。

私の知っている人で言えば、私の仕えている家、つまりリンクインハイド家は黒髪だ。

じつやら初代が黒田黒髪だつたらしく、その血が濃く出でているのだと思つ。

しかしこの青年、よく見なくとも結構な美形である。優しいと言つより、鋭いと言つほうの美形だが。

そんなことを考えていたら

「大丈夫か？」

「えー？ あつ、 はい」

いきなり声をかけてきたので、びっくりしてしまったが、何とか答えることができた。

こ、 声もなかなかいい・・・。

・・・つは！

危ない危ない。

つい、いい声だったので、ちょっと自分の世界に入ってしまった。

つとじ。

今はそんなことより

「な、なんだ兄ちゃん?! どうからきやがった! ?」

そう、私もそれを聞いたかった。先を越されてしまったのはこわそ
か癪だ。

・・・よし、この賊殺そつ。

・・・つは！

また自分の世界に入ってしまった。しかもなんか思考が危ないほうにいきかけた。

そんなことを一人でやつてこらめつづけに話は進み

「どうからつて・・・

そう言つて彼は

「空」

言いながら人差し指を立てた。

卷之三

•
•
•

「空あ？」

そう、彼ははつきり『空』から来たといった。

そんなことを言う人は神か、頭がおかしい人だろう。

だが彼は、見た目どこかがおかしいわけでもない。むしろ良い。

かといつて神々しくも・・・ある・・・?

あ、あれ?後光が見える?

私は田をこする。

あれ?見えなくなつた。氣のせいかな?

またまたそんなことを考へてこの話は進み

「つははははあー!冗談きついぜ兄ちゃんー!」

「空飛ぶやつなんて見たことも聞いたこともねーぜ?」

「頭でも打つたか?」

やつこい、賊達は大声を上げて笑い出した。

「確かに見た」とはあつませんが・・・」

そう見たことはない。だが、聞いたことはある。

ラインハイド家の古い文献（と言つても1000年ぐらい前）のなかに、かつて人類は自由自在に空を飛びまわり、世界最強種である『魔龍』と対等に戦つたとか何とか。

ただ、その後すぐ魔物の大侵略があり、英雄と呼ばれた人たちは次々に死んでいつたらしい。

ラインハイド家はその中で生き残つた一人らしい。

その後、この国【ラインハイド】の復興に一番貢献し、国王から感謝の印として【大公】をもらつたらしい。

初代は、その前から国に数多くの武器や防具を納品しており、かねてから爵位を与えようと国王並び重鎮の人たちは思つていたらしい。

だから、ラインハイドは実質ノ・ノ・ノの権力を握つてゐる。

閑話休題

だから、もしかしたらこの人もどこかの英雄の子孫かもしれない。

そんなことを思いながら彼を見てみると

彼は、賊に向かつて銃みたいなものを構えていた。

同級生死ぬつて

なんか実感わかないね。

やつらがいた（過去形）

やつらがいた

やりすぎた

Side・ベルム

俺は、賊に向かって銃みたいなものを構えていた。

ん?

何で銃を構えているかって?

ムカついたからだけど。

え?

職業に銃士なかつただろつてか?

ああ、そういうば言つてなかつたな。

職業によって、使う武器といつのが決まる。これはゲームなら当然の機能だ。だが、このゲームではあくまで使う武器が決まるだけで、その武器だけしか使えないということはない。逆にどんな職業だつたとしても、どんな武器でも使える。

たとえばアーチャー。これは基本弓というより、弓や短剣しか使わない。これは普通のゲームなら常識だと思う。だが、このゲームでは普通に大剣とか銃とか杖とか使える。つまり、本来後衛の職業なのに、バリバリ前衛で戦えるってことだ。

まあ、つってもスキル使えないし熟練度もあがりにくいので、そんなことするのはよっぽどアホか完璧主義者ぐらいだろーな。俺はどちらかって言つと前者だな。ある意味ネタ的な感じで使つてのからな。でも、攻撃力とか桁違いに高いから、本職の人たまに間違えられる。

LvMAXに熟練度もいつのまにかすべてMAX。おまけに、創造者になつたことによりスキルまで創れるようになつた結果、本職顔負けの完全無欠の反則級プレイヤーになつてしまつたわけだ。

で、何でいま俺が銃を構えているかといつと

ただ単に、離れている敵のそばまで行って倒すのがめんどくさかつただけだ。

剣とかだったらスキルを使えばいけるかもだけど、めんどくさい。

手甲もスキル使えばいけるけど、つけるのめんどい。

「だったら近く遠距離で」でもこけるけど、弦引くのめんどこ。

マジシャンだったら魔法で一気に殲滅できるけど、今は迂闊に魔法が使えそうにないので却下。

残るは鎌か槍か銃。

つか、ぶつちやけ氣分的にも銃使いたかったから出した。

おく？

とにかくスピードで早速

「死にたくないかったら

「へんなやうやうなやつるせーなー」・・・・

今話し始めたばかりなのに「へんなやうやうなやつるせーな」とか・・・。

つか、人話している途中に割り込んできやがって。

やのこパン屋さん？

バタツ

• • • • • • • •

ひまわりのうた

・・・だ、大丈夫だモチツケ俺。

・
・
・
あ。

お、落ち着け俺。

たぶん皆にきなりのことに対する吃驚して固まっているだけであつて決してなんかさつきから冷たい視線を感じるな」とか思つてないんだからなつ！ホントだよ！

パーンパーンパーン　　ドガーン！

『ウギヤああああああああああああああああああああ

あ、ついスキル『囮爆撃』使つてしまつた。

スキル『囮爆撃』

『囮爆撃』とは、ベルムが考えた新しい銃士系スキル。3回目までは普通に発砲し（当たらなくてもいい）、最後に気力とか魔力とかとにかく何でもいいから『力』を籠めて発砲する（囮を発砲しているうちに力をためる。それと複数の『力』を同時に籠めることも可能）。『力』がほぼ無制限にあるベルムがこれをやつたら、たぶん防壁とかマジ紙のように突破できる。さらにベルムの武器は基本+3以上なので、武器の性能もこの効果に足されて大変なことになる。今回はランクが一番下の『ベリアルの靈銃+3』を使ったので武器の性能はあまり追加されていない。

まあ、今回はあんまり『力』を籠め過ぎると、馬車にも被害が及ぶから程々にしたけど（でも、前方10mぐらい地面が抉れてる）。

…もつじつあつた?

み、短い・・・。

誤解で攻撃されたのもトノフレだよね～（前書き）

タイトルがもう内容に合ってんじゃん。

誤解で攻撃されるつてもテンプレだよね~

סידרְיָה

そうそれからは一瞬だった。

いきなり頭を抱えたと思ったら、こっちをみて涙目になり、銃を乱射した。

パンパンパン
ドガーン！

軽快な音を立てて発砲された弾丸は、最後だけ明らかに音が違つて

た。

最初から3発は

ヒュッ

といつ音だつたけど、最後の一発は

「オオオツツツ！－－！

といつ明らかにその銃から聞こえるはずがない音がした。

その後私達にものすごい土煙が襲い掛かってきた。

その土煙がよじやくはれて、賊達がいた方向を見てみると

「これは・・・」

賊たちは半分以上が吹っ飛び、生きていっても片腕がなくなっていたり、見ただけでも重傷というのがわかる。

私達は無傷というなんとまあ奇妙な結果になつた。

「うあう・・・」

「い、いてえ・・・いてえよ～・・・」

「た、たすけて、かあちゃん・・・」

あまりにもひどい状況に、やつすきだと思つたが、彼は

「それが今までお前たちが『』えてきた痛みだ。痛みは人を変え、負の感情を生み出す。お前たちは被害者じゃない。犯罪者だ。故に、このへりの『』と当たり前と思え」

彼の言葉を聴いて、ここいらが今何をしようとしていたか、今までどんなことをしてきたのか思い出すことができた。

少しでも同情してしまった自分を殴つてやりたい。

そうだ、ここいらはやっちゃんいけないことをやつていい。だからこうなつても仕方がない。

そう思つたら、自然とこの状況を受け入れることができた。

そして彼は、こつ続けた。

「貴様らは痛みを知つた。だが、一度犯した罪を拭えるわけではない。ここでお前らの命を絶つことは容易くできる。だが、それでは罪は拭えない。だから、貴様らは今まで自分がしたことを悔いながら生きてゆけ」

そういう後、賊達は氣絶し、体が白い光に包まれていった。

白い光がはれると、賊達の怪我は嘘だったかのように消えていた。

そしてこの現象を起こしたのは、たぶん彼だろうと、同時に思った。

いつたい彼は何者だろうか？

「貴様らは痛みを知つた。だが、一度犯した罪を拭えるわけではない。」
「お前らの命を絶つことは容易くできる。だが、それでは罪は拭えない。だから、貴様らは今まで自分がしたこと悔いながら生きてゆけ」

いや～、冗談など言つたが、これ俺のキャラじゃないんだよね～。

なんかその場のノリで言つてみたつていうが、言わなきゃていう変な衝動に駆られたつていうか。

まあ、悪するに『やつちやつたぜ』って感じだ。

とつあえず生むひて言つた手前、そのままだつたら出目を量で死んでしまう。

とつことで、とつあえず治癒スキル『オールヒール』を賊達にかける。

スキル『オールヒール』

『オールヒール』とはその名のとおり、対象の傷を、死んでいい限り完璧に治すスキルである。それに、対象は複数でも治すことが可能なので、ヒーラーには欠かせないスキルである。だが、その分一回の使用でスキルLV1でもMPが770もつていかれるので、ちゃんと計算して使わないとすぐガス欠になってしまいます。

閑話休題

ふう〜。

これでとりあえず大丈夫だね。

じゃあ、後はこいつらを馬車にくくじつけて

「あ、お嬢さんこいつら馬車にく
「貴様〜ラミリアさんから離れろおおおおおおお〜〜」・・・・・

ガンッ！

うん、なんか誰かこっちに向かってくるなー、ってのはわかったよ？

それなりに強そーな気配だったから、この人の仲間かなー、と思つて別段気にしてなかつたけどまさか切りかかつてくるとは思わなかつた。

これなんてテンプレー、と思いながらあの人人の顔を見ると

サササツー

おおひつーー？

真つ青でいるやいます！

あんなに真つ青になつた顔、17年生きてきたけど初めて見た。

そんなことを考へてみると

「貴様へ、ハリコアせん」手を出さうとはこどくよ「ガンツー」
「いつて~!」

「アーリー・レイル！ な、なんてことあるんですか！」

「え、ええっ？えっと、俺はラニアさんを襲おうとしていたあいつを倒そうと思つて」

「その人は襲おうとしたんじゃなくて、賊から私達を救つてくれたんです！！」

「え、ええ！ ほ、本当ですか？」

やつ置いて、レイルと呼ばれていた少年は俺に聞いてくる。

「ん？ まあ、助けたな」

「うーん、申し訳ありませんでした！」

そう言つて、レイルは土下座した。

・・・土下座した！？

俺はとりあえずレイルに近づき

・・・・・立ち止まらぬ?
・

誤解で攻撃されたのもトントンフレだよね～（後書き）

ふう

今日の葬式少しひのりと来た。

誤解が解けて（前書き）

ねむーい・・・。

評価300pt突破！

お気に入り100件突破！

やつたね・・・・・ねむい。

誤解が解けて

Side・ベルム

「先ほどは本当に申し訳ありませんでした」

「「めんなさい」

「迷惑をかけたな。すまなかつた」

「ああ、いいよ。そんな気にしてないし・・・」

やあ、なんだかすっ「ぐく」疲れたベルムだ。

あの後、無事（？）誤解も解け、彼女達は謝罪をしてきた。俺自身は特に怪我したわけでもないので、何回も謝られると逆にこっちが申し訳なくなる。俺は生粋の日本人だ。たぶん、日本人ならわかつてくれるだろう。

まあ、そんなことは置いといて。

「君達はなんでそこの賊に襲われていたんだ？」

「……それは」

「たぶん私の所為です」

そう言つて馬車から一人の少女（つつても見た目16、7歳だけどね）が出てきた。

「君の所為？」

それって「どーゆー」と？といつ意味を籠めた目でその少女を見る。

「私はこの国の大公の娘です。それでたぶん私を捕まえて、身代金でも要求しようとしたのでしきつ」

『大公』

爵位の最高位に値する貴族。各國に1家だけ存在する。その後に、公爵・侯爵・伯爵という風につづく。実質國のN.O.・2。

おおい。

まさかの大公の娘か。

俺もゲーム内では、大公の爵位持つていたけど、結構大変だった。

なんてつたつて、国のN.O.・2だ。

国で起こった良いこと悪いことの後始末をしなきゃいけない。

普段の雑用やらなんやらは、使用人や奴隸にやらせたり、気が向いたら自分でやつていた。

主にパトロールをかねたゴミ拾いとか。

おかげで近隣の国には、自国が清潔だと、それは大公家のおかげだともつぱりのつわさだ。

そしてそんな大公家にも、3つの教訓があつた。

一つ目！

『働くがやるもの、食うべからず。つか死ねつ！』

これはそのなのとおり、働くがやるものにやる食い物はねーよ、つてことだ。つか、そんなやつ死んでしまえ、つてのも忘れちゃダメだ。これは使用人や奴隸だけでなく、俺たちの家系にも言えたことで、俺たちも仕事をサボるとこの家訓の対象になる。まあ、家に働くかないアホはいなかつたから誰も対象にされなかつたけどな。

2つ目！

『奴隸も人であり、たとえそれがどんな人であろうともなかろうとも、相手を尊重する！』

これは、たとえ雇つた奴隸の姿かたちが醜くとも、人じやなく亜人や獸人であつても相手の尊厳を損ない行動はしない！、つてことだ。奴隸だからといって馬鹿にするのではなく、たとえどんなやつでも敬え。この家に雇われたら、もうこの家の家族も同然。これは奴隸だけでなく使用人にも言えることで、皆家族説といわれている。

3つ目！

『仲間のピンチには、たとえどんな状況だろ！と助けにいけ！』

「これもそのなのとおり、自分がいかに絶体絶命満身創痍気絶寸前だとしても、仲間が危ないときは助ける、ってことだ。逆に、仲間を見捨てるクソヤローは家にはいらない、ってこと。2つ目の皆家族説と同じで、仲間も家族同然。助けるために力を惜しむな。たとえ最善の策が思い浮かばなくても、自分と仲間が助かる方法を全力で考えること。仲間を助けて、自分が死んだら元も子もないからね。」

まあ、大抵の貴族は家の家訓を聞いたら『は？何いってんのこいつ？』的な目で見る。けど、この国の全ての家の家訓は、俺の家の家訓に感化されたのか、大体同じようなものだ。他の国的一部ではあるが、結構上の貴族も大体こんな感じだった。

「へえ、大公家の娘さんか・・・」

「はい。最近魔物が活性化していると南国での報告があつたので、その調査をしていた帰りです」

「魔物が活性化・・・・・・もしかして魔王の所為か?」

「つー?・・・・・・なぜそつ思われますか?」

「なに、ちよつとした昔話を思い出してな。その状況が似ていただけだ」

「そう昔話。あの森が俺がゲームの中で見たときより、数倍でかくなっていたことを見ると、ここはたぶん俺がゲームをしていた世界よりも遙か未来であることが予想される。大体の形は同じだったが、いくらなんでもあの森を抜けるのに時間がかかり過ぎていた。それに、上から見たときもなんかでつかかつたしな。

んで昔話つてのは、俺がやつてたあのゲームのこと。詳しく述べと

開始3ヶ月で魔王が出現。

魔物が活性化。ついでに国に侵攻してきた。

経験値がなんか倍になつた。

レバーパーすぐでひはひは。

でも、初心者にはきつい。

だから誰か魔王を倒してクエスト発動。

でも、魔王のところに行くまでの敵強過ぎていけない。

そこで俺登場！

仕方ないからいくか、つて気分で出陣。

魔王のところまで難なく到着。

なんか笑い方ムカついたから、最上級魔法連續でぶつ放す。

魔王1ヶ月で討伐完了。

俺勇者、侵攻防いだやつ皆英雄。

やつたね貴族になれたZE！

つてな感じ。

つか、ぶつちやけ魔物の活性化とか、テンプレで魔王の所為以外ありえない。

「へい」と言つてみたりといつやいびん。

「てな感じだ」

「は、はあ？ 何を言つてゐんですか？」

「おつと、すまん。いつかの話だ」

「はあ・・・・。まあ、そのとおりです。原因はたぶんですが魔王です」

ふむ。

つてーことまだ。

またあいつを倒しにいけばいいのかな？

まあ、面倒だけどいつか行くか。

そんなどよつ今は

「へい」で二つの間にか加わつてこる、やうのあと方せばりやう

で？」

『えつーー?』

「ねむ、やつと戻つててくれた」

「まつたく、皆無視するなんてひどいです」

「ユーナイトインー」

「どうやら」の人たちも仲間らしい。いきなり攻撃してこないところをみると、最初の二人よりは幾分冷静なようだ。

「・・・あ」

「へ・どかしましたか?」

「こりで重要なことこきががついた。

「あらこえぱれ・・・血口紹介してなかつたな」

『・・・あ』

「え？ なに？」

「またバカやつたの？ お姉ちゃん達」

・・・俺もそのバカにふくまれんのかな？

誤解が解けて（後書き）

なんか・・・日本語がおかしい

つーか文脈がおかしくなった。

たぶん途中で寝たからだなww

血口紹介・・・やつとか（前書き）

やつとか紹介・・・

あ、曾ばあちゃん死んだって電話をました

最近物騒です。

私も死ぬかも。

自己紹介・・・やつとか

Side・ベルム

「あー、じゃあ、まずは俺からだな

やあ、前回馬鹿疑惑がついてしまったベルムだ。

・・・俺は決して馬鹿ではない！

アホなだけだ！

「こ」は譲れない！

と、まあ、冗談はさておき。

早速自己紹介に入りたいと思つます。

「俺の名前は・・・ベルムだ。一応冒険者をやつていい

「ベルムさんですね

「ベルム・・・」

「うーん? どこかで聞いたことあるよ? な?」

「僕も聞いたことあるよ? な? な?」

「ん? 皆? ひし? た? な? だ? な? ？」

なんか何かを思い出? ひし? としてる? ほ? い? け? ど? (一人を除いて)。

「ちなみにファミリー? ネームとかはないのか?」

「ん? ああ、まあ、"R" とだけ? ひし? お? い? か? な? 」

「"R"?」

まあ、たぶん? こ? が未来? だとしたら、俺のファミリー? ネーム知つ? て? いる? 人がいる? だ? う? から? な?。迂闊? には名乗? らない? ほ? う? が良? い? だ? う?。一応大公? だ? た? し?。過去? に魔王? 倒? した? し?。

「じゃあ、次はそちら? で?」

「あ、はい。そ? う? す? ね?」

そう? ひ? て、馬車? の御者? をして? いた? 人が自己? 紹介? を始めた?。

「私はラミコア・スフィルです。リインハイド家筆頭メイド兼護衛をしていります」

「ん? リインハイド……だと……?」

「は? ……あつ」

「あつちやー」

「たまにせいかすよね、ラミコアをさつて」

リインハイド家。

なぜ俺がこの名前に反応したか。

それは

そうか、まさかこんなとこに繋がりがあるなんてな。さすがの俺でも、予想外過ぎて2秒くらい思考が停止してしまった。

俺のフルネームが『ベルム・ダ・エル・リインハイド』だからだ。

これはもひつ偶然つて言つたか運命だよな。

とか思つちやつてゐ俺はアホオだな。

偶然だよな偶然。

うん俺は氣にしない。氣にしない。ハゲルゾ。

「うん、まあ、それはもう良いとして。次いつてみよー」

「良いんですか！？」

「まあ、本人が言つてるから良いんじやない？」

「やうだぜ」

うん、早くして欲しいなー。じゃないと俺が冷静じゃなくなつちやう。

「じゃあ、次は私が

そつ言つて次は馬車から出てきたお嬢サマが自己紹介を始めた。

「私はミラネス・ア・エル・リインハイドです」

「ああ、大公の娘さんね」

「え、ええ、まあそうですけど・・・」

「・・・」

「気にしない気にしない。俺も大公だけど気にしない。」

「えっと、僕の名前はレイル・マービィルつてあります」

「ああ、突撃っ子ね」

「うう」

「・・・」ホン。私はサラ・マービィルだ

「ううあはフラン」

「フラン?」

「いや、なんでもない」

どうやらアーヴィングは、フランとこの「眞葉はないよつだ。まあ、どうでもここことだけど。

「コーナはコーナ・マービィルだよ コーナちゃんつて気軽に読んでね」

「わかつた。よろしく、コーナちゃん」

「あはつ よろしくね、お兄さん?」

「お兄さん・・・悪くないな」

なかなか元気がよろしげうつで。・・・結構可愛いかも。しかもお兄さんつて・・・いいよね。

「俺は『ティン・マービィルだ。一応この中では最年長だ』

「へえ〜・・・4人ともフア//コーネームがマービィルだけじゃ、もしかして兄弟とか?」

「ああ、一応俺が長男で、一番上だ」

「僕が次男で、一番したです」

「私は長女だ」

「次女です」

ふむ。

「どうやら デイル>サラ>コーナ>レイル の順番らしい。」

「ちなみに歳は?」

「私は17ですよ」

「私は16ですよ」

「俺は19だ」

「私は17だ」

「私は16だよ」

「僕は15ですよ」

「ほつまう。

どうやら デイル>サラ>ミコア=サラ>ミラネス=コーナ>レイルの順番らしい。」

まあ、大体予想はついていたけどね。

「ちなみにベルムさんは何歳ですか?」

「ん？俺か？おれは17だ

『・・・え？』

・・・・・何だお前らその反応

泣くぞコラ。

自己紹介・・・やつとか（後書き）

金曜日葬式いつてきマフ。

拝みにいってたら遅れました

ひとつあるべき

S.i.d.e.・ベルム

「お前らなんだその反応」

歳言つた瞬間

『嘘だろ?』

といつ視線を向けられたベルムだ。

「いや

「だつて」

「ねえ・・・

「うむ

「絶対20歳超えてると思ったらし

どつやうり俺は20歳超えてるよ!ひ見やるひこ。・・・マジでか。
初耳なんですか?」

「・・・そんなに老けて見えるか?」

「え?」

「いやいやいやー。」

「カツコイイからそいつ思つただけですよ」

「確かにレイルやティーンと違つてカツコイイな」

・・・カツコイイと言われていやな気はしないが、そんなこと言われたことないし、はつきり言つて俺はフツメンだと思う。どこにでもいる平凡な高校生。それが俺の自分自身についての評価。友達からはなぜか『お前つて結構鈍感だよな~』とか言われて、よくため息つかれる。・・・なんでだ?

閑話休題

「お世辞でもありがと」

「いやいや」

「本当のことですよ?」

「またまた」謙遜を

「・・・その言葉は人によつて殺意を抱かれるから氣をつけたほうがいい」

殺意とか・・・また物騒な。

ちよと『親の仇』的な視線を送られることがあるが、さすがに殺意を向けられたことはないな。

まあ、それも1、2回ぐらいだし結構皆、友好的だったな。

なんか男子より女子のほうが友好的に接してくれたのは謎だけど。

何で俺と話すと、どもるのかいまだにわかんない。

女子って不思議だなー。

不思議つていえばこの女心つてやつも不思議だよな。

もひ、俺には一生理解できないと慰ひ。

つか、理解できる男とかもつ男じやないだろ。

あれだよあれ。

『残念なイケメン』が『それはもうイケメンって言わなくね?』と思つのと一緒に緒だ。

・・・ちがつか。

「ヒカルやあ~

「ん?」

また、ぐだらないことを考え始めていたら、コーナーが話しかけてきた。

「Jリーグに来た時から思つてたことなんですね?」

「なんだ？」

「何か問題でも？」

「どうやら俺らに質問があるらしい。…………できれば、俺に関係ないことがいいな。

「この大きな溝って…………なに？どうしたらいつなるの？」

「…………」

「あ、たしかに」

「誰がやったんだろうか？」

「はい犯人俺ー！つか、もう俺に関係ある。やったの俺だし。

「それにこに転がってるのって…………“賊”だよね？」

『…………あ、本当だ』

「やつこいえば忘れてた」

やつべ。レイルに攻撃されてからそのまま放置してた。てか、今まで存在 자체忘れてた。

ああ～。これって説明したほうがいいのかな?

「ああ～、ちよつといいか?」

「はい? なんでしょうか?」

「ん?まあ、かまわない」

とりあえず、コーナの疑問に答えることとした。

「まづこの溝についてだが」

「うんうん」

「やつたの・・・ぶつちやけ俺だわ」

『・・・え?』

「ああ、そうでしたー!」

『?』アはなんか思つ出したよつて、他ののは『虚・・・だろ・・・』
的な視線を向けてくる。

「まあ、ホントだ」

「えつ、じやあじつひやつたの？」

「あ～、じこひで、じつ、バーンと？」

そう言ひて『ベリアルの靈銃+3』を腰のベルトから抜く。まあ、+3程度なので『あまり価値は高くないだらつ』と黙つて西の前に出した。

みんな珍しいものでも見たよつて、銃を見てきた。

「へえ～きれいな銃ですね」

「なかなか凝つた意匠ですね」

「こんなにきれいなものは見たことありません」

「保存状態も良いくようだな

「ほえ～きれ～い」

ただ一人を除いて。

「・・・ベルム殿」

「ん? どうした?」

「その銃、少し見せてもらいますか?」

そうサラが言つてきた。

「え? ・・・まあ、いいけど」

別にそんな貴重なものでもないし、壊れたり盗まれたりしても、もつと良いものあるしね。

「」れは ・・・

「どうかしたんですか? 姉さん」

「その銃になんかあるの?」

サラは銃を手に取つた瞬間、いろんな角度から銃を見て、驚きの声をあげた。

何してるんだろう?

「ああ、ベルムさん。サラは生まれつき武器・防具やアイテムの『等級』を見ることができるんですよ」

「『等級』？」

「ええ」

その『等級』がいったい何なののかは解らないが、どうやら『じこ』能
力らしい。雰囲気的に。

「で？ どうだつた？ サラ」

デイルが待ちきれずサラに声をかけた。

「『J』の銃・・・レジонンド級で、しかもRANK3だ

『！ ！ ？ ？』

サラがデイルの問いに答えた瞬間、皆が驚きの表情をしたまま固ま
つた。

いつたい何があつたんだ？

ね
む
い

帰つてきたのが11時。

目がシバシバする。

まわか俺が造つたものが「んなん」となつてゐなんて・・・（前書き）

いつの間にか総合評価が400になつてた。

びっくり。

「なんか俺が造ったものが」しなじみになつてゐるなんて・・・

Side・ベルム

「ええひとりよつとここか?」

『・・・・・』

問い合わせに誰も答えてくれなくて少し凹んだベルムだ。

・・・皆揃つてひどいやつ。

「・・・せつにいか?」

「・・・ハッ!」

「あ、すみません」

「ちょっと驚き過ぎで」

「うむ・・・」

「」の武器がそんなに弱いものだと思わなかつたなあ・・・

「・・・」

「どうやら躊躇して少しの間思考が停止してただけだそうだ。

・・・無視してたんじゃないんだ。

よかつた。

「ところで、その『等級』ってのはなんだ?」

『えつ?』

え?

なにその『そんなことも知らないの?』的な視線。

この状況で『知りませんけど何か問題でも?』つていいたくなるのは俺だけじゃないはず。

・・・そう思いたい。

つか、そりであつて欲しい。

じゃないと俺が痛い子みたいになつてしまつ。

『何言つてんのこいつ』的なね。

閑話休題

「ええと

「

その後、ラミリアから『等級』について詳しく聞いた。まあ要らない部分を省いて説明すると、『等級』というものは、武器・防具やアイテムがどのくらい強力なのかをあらわすために用いる言葉らしい。『等級』の種類は、『一般級』・『特別級』・『伝説級』・『究極級』・『神具級』の5つあるらしい。それで、その『等級』の中にもランクがあるらしく、最低がRANK1で、最高がRANK3らしい。RANK1が1つのステータス+、RANK2が2つのステータス+、RANK3が2つのステータス+と特殊効果が1つとなるらしい。ただ、一般級にだけRANK0があるらし

く、一般的な兵士は普通これを使つてゐるらしい。

『一般級

ノーマルクラス

武器・防具でどれかのステータスが+1～5相当のものをさす。特殊効果として『速撃』や『連歩』、『我慢』などの下級効果があるらしい。

『特別級

スペシャルクラス

武器・防具でどれかのステータスが+6～35相当のものをさす。特殊効果として各『精霊の加護』や『鉄壁』、『連撃』などの中級効果があるらしい。

『伝説級

レジェンドクラス

武器・防具でどれかのステータスが+36～100相当のものをさす。特殊効果として各『武具神の加護』や『滑空』、『吸収』な

どの上級効果があるらしい。

『アルティマクラス
究極級』

武器・防具でどれかのステータスが +101～255相当のものをさす。特殊効果として各『精靈王の加護』や『武神の加護』、『千里眼』などの最上級効果があるらしい。

『ゴッドアイテムクラス
神具級』

武器・防具でどれかのステータスが +256以上のものをさす。特殊効果は、今まで『神具級』の武器や防具が、2つほどしかなかつたらしく、その2つがどちらもRANK1だったことからわかつていない。

大体こんな感じだ。

『ベリアルの靈銃+3』は腕力 +42、運 +55、特殊効果『狙い撃ち』がついてる。

・
・
?

待てよ?

つてことは何か?

俺がつけてる防具とかアイテムつて、ほとんどが『伝説級』や『究極級』つてことか?

・
・
・
・
・
あ、
あぶねー。

『外部特殊干渉遮断』っていう特殊効果があるマントを羽織つててよかつた。

これは、その名のとおり、誰かが俺の防具とかを勝手に鑑定とか悪戯しないようにするためにつけた特殊効果だ。

これなかつたら今頃もつとメンドクサイ」となつてたかもしだいな。

閑話休題

「へえ～。つてことは俺のこの銃はそれなりにすごいのか？」

「それなりに、ビリルジヤあつませんよーーー？」

「『伝説級』つてだけで、確実に国宝級の武器ですよーー？」

「しかも、RANK3!!!」

「もう、かっこことしか言ことよづがなーよーーー

「ちひ

「・・・・・・・

・・・・じゅあ、俺がこままで國に納めていたやつは全部『特別級

になるわけか。

なるほど。

道理で俺の好感度が上がりまくるわけだ。

俺の所属していた国は珍しく、汚い貴族が少なかった。

まあ、その少ない貴族のほうも俺が直々に制裁してやつたが。

それは、まずほつといて。

わざわざからサラが無言なのがなんか怖い。

とつあえず声をかけてみるかな？

よしそう決まー「ちよつといいか？」

「へ？」

あ、やべ。

つこへんな声だしてしまった。

幸い皆の興味は銃に向いていたらしく、サラ以外に聞かれることがなかったようだ。

・
・
・
ああ。

「・・・」ホン。で、どうした?・サ!?

「ああ。・・・」の銃はどうで手に入れた?」

なるほど。

まず間違いなく『国宝級』になる武器をなぜたかが『冒険者』が持つているのか、つてことね。

うへん。

正直に俺が造つたつて言つてもここナビ、やつするといつねへなるよな～。

でも、なんかこいつらに武器をついたへないしなあ～。

うへん。

うへん。

「はい？」

「あ～、頃ひよつと良いか？」

決めた！

・・・よしー

「なんでじょうか？」

「どうしたんですか？」

「どうかしたか？」

「ん？ いこよ～」

「ああ」

俺の呼びかけにこたえてくれる皆。

俺は冷静に、やつ、極めて冷静に話す。

「俺はいまから重要なことを話す。そのことを誰とも言わないと約束してくれ」

「？？」

「べつにこりですけど？」

「だいじめの毛」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

よし。

「ああ～、その武器についてだが・・・」

『・・・ゴクシ』

「ぶつちやけ俺が造つたんだわ」

『・・・・・・・・・・・・は?』

・・・おじさん、おじさん、おじさん。

まわか俺が造つたものが「んな」になつてゐるなんて・・・（後書き）

火葬に行つてきたけど

髑髏しきながほとんどなかつた。

びっくりした。

し、しめ

頭がいたす。

ひじきむかし

Side・ベルム

『・・・・・』

なんか前回も似たような始まり方をしたような気がするベルムだ。

確か前回は、俺の持っているこの銃が『伝説級』のRANK3だつたつてことで、皆固まっていたな。

そういうばさ。

なんか俺忘れてる気がするんだよな。

なんだっけか？

うん。

ううん。

あ～・・・・・。

あこつひは・・・相あわらざ馬車近くに地面で氣絶してやがるが。

あ。

思い出した。

そういえば、またあの“賊”を放置したまんま話し込んでしまった。

まあ、あんだけの攻撃食らつたんだから、無理もないか。

起きたとき大変だろーな。

主にあいつらの精神が。

そんなことを思いながら、とりあえず“賊”に近寄つて

「・・・なあ、そろそろ行かないか?」

『・・・・』

・・・まだ無理っぽい。

1時間後

「本当に何度も何度もすみません

「あまつともおかしなことこので

「うむ……たしかにな」

「もうひー-[冗談でもいっていいことと悪いことがあるんだよー。」

「いや、ホンとのことなんだが?」

『・・・・・』

おい、またか。

いや、今回はさすがに待ちきれん。

そこまで俺は磊落な性格ではないからね。

ひと、こいつひと

「はあ……『神経落雷』」

『つづつ……?』

『神経落雷』ってのは、ぶっちゃけ攻撃した後の硬直をなくして、体力と魔力が続く限り攻撃し続けるために生み出した技だ。今回は、

硬直をとめためにやつた。まあ、少々ビロジックとするがな。

「な、なにするんですかー！」

「び、びっくりしたー」

「ううひ、ひひ」

「まあ、皿業皿體つてとこだ。再び患者を前にせたお前、りが悪い

『う』

まあ、もともとの原因は俺なんだなびね～。

べつでもここにさべ。

「こじや、といあえず、『ここひ』を衛兵に渡したいから、町にい
こせ」

「あ、そういうばこいたんでしたね」

「ああ、忘れてたー！」

「あはは～・・・」

「と、とつあえず行くか」

いつも使っていたのは俺だナジやないよつだ。

・・・よかつた。

やつと馬車に乗つて、今ここれから一番近い街『ラインハルト』にむかつてこる。

『ラインハルト』はこの国『ティンハイド』の首都『リインハイド』の次に大きな町らしい。

なんでも商業が盛んな都市らしい。

それに、大陸でも5つしかない魔法学園があるらしい。

この大陸には3つの国があり、その首都にそれぞれひとつずつあるらしい。

まあ、国が前はまた後で話す。首都も。

んでも、その『ラインハルト』はそれぞれの国の国境の一一番近いところにある。

つっても、30km以上離れてるから近いのかはいまいちわからな
いが。

で、幸いさつき俺が上空で見た街の1つが『ラインハルト』らしい。

『ラインハルト』まで後10kmぐらいだと思つ。

まあ、こんな無駄話をしたのは、あれだ。あれだよ

• • • • • • • •

そう！

わから馬車の中で会話とこの会話がないんだよ！

つか、俺以外全員女性だし、何はなしていいか分からぬ。

デインは、じゃんけんで負けて御者に。

・・・はあ。

オレにやがれると。

アーチモード (後書き)

短い

笑顔（前書き）

葬式

1週間置きにやつてゐるが。

Side・ベルム

『・・・・・』

相変わらずな空氣にびびしていいか分からぬベルムだ。

いや、マジで。

わざの空氣無理。

マジ勘弁。

俺この空氣はもう過ぎる。

あんな口調だが本来俺はもつとおひやうけて・・・るのかなあ。

まあ、面白いこと生きがいを感じて居るから、結構やうこのかな?

まあ、そんなことはないとして。

「どの程度を何とかすべく誰かに助けをもと

ミラネス・窓から外眺め

「リコア・ほへえ」

サラ・思案顔ですが何か?

ユーナ・お姫寝中だよ! 起こさないでね

『デイン・御者で』れる

レイル・上に回じでおこな

「ねえ、この詰みゲーだよ！」

つか、馬車の中に男が俺一人つてところでもはや無理ゲーだよ！

コーカはなく黒車の中で躍れるなあ！

ムードメーカー寝るなよ！

ああ、いいですよ。

「か？」
皆がそんな態度取るんだつたら、俺だつて勝手にし「ちょっとい

「はいなんでしょうー」

「何故に敬語！？」

・・・コホン。・・・なんだ?」

「言い直した！？もう遅い気が」

「な・ん・だ?」『ガガガガオオオオ

「・・・・・・あ、ああ」

だつていきなり話しかけられたから敬語になつてもしじうがないじ
やん。

しかも今まで誰も話しかけてくれないしつ。

つこつれじくて、ランションもひよつと上がつりやつたナビね。

つか、ナウセんよ。

何か震えていませんか?

え?『氣のせい?』

だよねー。何か手が小刻みに震えてる氣がするナビ『氣のせいだよねー』。

ミラネスとラミコアとかも震えてる氣がするナビ『氣のせい』。

やつすべては『氣のせい』なのぞー。

「で？話しかけたつてことは俺に何か用があるんだよな？」

「あ、ああ

「じゃあ、遠慮せずに聞いてみろ

そうこたとたんサラは真剣な表情になり、

「あの銃は・・・

「ん？」

「ベルム殿が造つたので間違いはないんだよな？」

「ああ、わうだが

「ところは、材料さえあれば、アレ”級のものは造れるつてことだよな？」

「ああ、できるや」

まあ、俺は本気を出せばたぶん「ひ略」『神具級』の物だって造れると思つ。

実際、『神具級』を作るのに必要な素材は、倉庫に腐るほどある。

「ぶつちやけ、武器・防具倉庫の中にも『神具級』のものはあると聞いたわ。

ん?

“あの”武器とかはビリしたかつて?

“アレ”は一応封印倉庫に入れてあるぜ?

だって、“アレ”装備したら無敵じゃん。

まあ、スキルALL MAXの時点でもはや無敵だが。

んなこまけえこたいいんだよー。

話は戻つて、

「だったら『特別級』も造れるってことか?」

「まあ、やつなるわな

クラスが高いほう造れて、低いほう造れないことが多いことは、よっぽどのことがない限りないからな。

「じゃ、じゃあ・・・」

「お、おう

「私に『特別級』の武器を造つてもうえないだろ?」

『・・・・・・・・』

予想外の申し出に、俺とミラネスとミリアが素つ頓狂な声を上げる。

・・・マジですか?

たしか+6～35の間だったよな?

ん~。

できないことない。

つか、北半でもできる。

まあ、造ってあげても困る」ことなこと思つからこか。

「まあ、別にここんち

「せ、本当かー?」

「ホントホント」

「あ、あっがといひー」

・・・おおや。

その笑顔は反則ですぜ。

わつわつめでやつと仮面固だつたから、余計にあがつこ。

てかた、今思つたんだがどう、

この馬車に乗つてゐる女性組みレベルメッチャ高くなつ。

うん。

改めてよく見てみると嘘れん可愛いですね、はい。

ミラネスは、儂げな美少女的な雰囲氣があるものの、どこか筋が通つてゐる印象を受ける。

ハニアは、なんでも完璧にこなす美人系お姉さんだけど、どこか

抜けてる気がする。

サラは、クール系の美人さんだけど、さつきみたいに笑顔は超可愛い。

ユーナは、活発系美少女で、皆のマスコット的な存在だ。

閑話休題

「じゃ、じゃあ、本家に着いたら早速造ってくれ！」

「ああ、任せろ」

「約束だぞ！」

何かサラさんが今にも鼻歌を歌いそうなほど」機嫌だ。

・・・あ、鼻歌歌つてる。

まあ、笑顔なのはいいことだよね。

Principles.

お金では買えないものがある。

Principles.

大事なことなので一回書いてみた。

短い

21話で投稿したのに

20話と同じになつていていたといつ不思議現象。

ぶつつけ本番でやつてるから

下書きが無いといつぶへらあ！

死ぬかと思った。

かひとひだり・・・

街に到着！

Side・ベルム

「ふ～んふ～ん ふ～んふ～んふ～ん 」

『・・・・・』

サラの超御機嫌つぱりに若干引きつも可憐こと思つてしまづベルムだ。

毎回自分の名前を言うのも飽きてきたが、これが俺の基本スタイルだ。今後もこの調子でいくぜ。

と、まあ、サラのおかげで幾分か空氣も軽くなり乗ったときより気が楽になった。気がする。

ここはサラに感謝だな。

ふと俺は疑問に思った。

「まだ街に着かないのか？」

出発してから、もう2時間くらい時間が経つてる。

俺が感じた限りでは、この馬車は時速10km位でてるはずだ。

あの場所から街まで大体20km位だったはず。

だからそろそろ着いてもおかしくないんだが。

「もう少ししたら着きますよ」

「防壁ももうすぐそこありますからね」

リラネスが言つた言葉に反応して、窓から外を確認してみる。

「ねえ・・・」

そこには、

圧倒的な質量と存在感を放つ、

全長18mはあるであろう巨大な『壁』だった。

18mといつたら某国民的ロボットアニメとほぼ同じ身長である。

日本人だつたら、少なくとも100分の1の人は知っているであろうのでかさ。

それが街全体を覆つていてる。

「何でこんなでかい防壁があるんだ？」

まあ、俺だつたらたぶん吹つ飛ばせるが。
間違つてもいいでそんなこと叫わない。

「え？」

「知らないのか？」

「えー？ 皆知ってると思ったんだけどなー？」

ふむ。

俺の質問に何一つ答えてくれないこの人たち。

その信念には脱帽

するわけあるかっ！

まつたく。

ちょんと答えて欲しいぜ。

「で？ なにがあつたのか？」

「はい、」

長かつたので省略をせともらつたが、簡単に説明すると、この国『テインハイド』に軍事国家である『リストイニス』が2年前宣戦布告したらしい。内容は、『今から2年後、貴殿の国に侵攻を開始する。心して待たれよ』って感じ。その結果、『リストイニス』に一番近いこの『ラインハルト』が一番最初に攻められると思い、この防壁ができた。

まあ、こんな感じでいいと思つ。

それにも

「リストライミスのやつら・・・運が無かつたなあ・・・」

「え?」

「いや、なんでもない」

「? どうですか」

もし『リストライミス』がここを攻めてきたら、そんときは俺も容赦はしない。

せいぜい本国の運の無さを呪うんだな。

とか、ただいってみたかっただけ。

でも、本当に攻めてきたら、潰すつもりではある。

つか、潰す。

「あ、ベルムさんー街に到着しますよー」

「ん? やつとか・・・」

どうやら街に着いたらしい。

とりあえず俺が持っているこの通貨が使えるかどうか調べるのと、ギルドカードが使えるかどうかを調べる必要があるな。

あ、わくわくしてまた。

街に到着！（後書き）

ぐふつ

まだ中に入れないの？（前書き）

あ、頭が

割れる・・・わけないか

まだ中に入れないの？

Side・ベルム

「セレの馬車…止まれ…」

なぜか疎外感を感じてるベルムだ。

そんなことより。

衛兵が声を荒げて、こちらに命令してきた。

この馬車に大公の娘が乗つてるってわからないのかね？

わかるわけないか。

この馬車の外見は、普通の馬車となんら変わんないからね。

まあ、中もさして変わんないが。

あえて言つなら、窓の上に大公のマークが刺繡されてるだけだね。

このマークもどっかで見たことがあるよつた。

メツチャ 身近にあるよつた。

つか俺の家の家紋に似てる気がしないでもない。

つか、ほほ回じじやね？

うん、氣のせい氣のせい。

そんなはずあらへんがな。

何で口調かわってんねん。

・・うん。

マジで落ち着け。

落ち着け俺、まだいける。

よし、落ち着いた。

(この間0・5秒)

話は戻して。

外見は一緒つて言つても、御者の一人を見て気づかないものかね？

確かに、あの一人にもさつきの刺繡と同じものがついてた気がする。

・・・もしかしてあの衛兵、新人とか？

うん、ありえるな。

ちょっと見てみますか。

(スキル『心眼』並びに『地獄耳』発動)

『心眼』

心眼とは、武術などを極めた達人が開眼するもの。気の流れでモノの位置を把握したり、障害物に阻まれているものを見ることができる。発動しても一般の人は気がつかない。気がつくのは、同じ境地にいたつた達人だけ。といっても、人それぞれに熟練度というものがあり、見える範囲や物の大きさ、鮮明度が違つてくる。

『地獄耳』

その名のとおり地獄の如くものすごい耳。主に勘のいい人や武術

の達人、妙齢のお嬢・お姉さんが持つている。もちろんすこさは、勘く達人く妙齢の人、の順番である。さすがお姉さん。最高2km先のことまで鮮明に聞こえる。使い慣れていないと激しい頭痛を伴うため、熟練度は高い人でもせいぜい1~3ぐらい。もちろん俺は1~50までちゃんとやつたが。ただ、例外もあって、お姉さんの年齢や体重のことを話すと……。ガクガクブルブル

(お、見える見える)

外の様子が手にとるように見えるぜ。

「お前達一どこのものだ!」

「ぬ? 見てわからぬか?」

「その前に、貴方が名前を名乗つてください」

おほつ。

レイルのキャラが。

何かメツチャ冷酷な人になつてゐる。

「田が、田がああああああ！」

つてことになつてゐる。

「なにをお！」

「うへむ。宣戦布告から2年経つてゐるから、皆氣が立つてゐるのか？」

「だとしても、常に冷静でなければいけないことに何が変わりはないませんよ、兄さん」

「確かにそうだな」

「それは俺が冷静ではないと申すか！」

「まあ

「そうなりますね」

「貴様等！王都騎士学園を4年で、しかも首席で卒業した、アルヴィン・ナル・シ・ブリエット様と知つての狼藉か！」

「ブリエットって

「あの伯爵家の息子か」

「やつだ！俺様のすゞさを思い知つたか！」

・・・うわあ～。

俺が一番相手にしたくないタイプだわ、こいつ。

なんか、あまりのうれしさで殴り飛ばしたくなつてくるんだよね、こ
一ゅーやつ。

ああ、ほら、今も俺の右手が。

しかも、伯爵とか。

この馬車に乗つてゐる大公家だぜ？

公爵より上の家に喧嘩売つてゐるよ。

ホント、何で気がつかないんだろうね。

つか、何で貴族なのに騎士？

・・・まあ、いつか。

「ああ～、ちょっといいか

「なんだ！」

「ちょっとこの紋章、見てもらえます」

あ、デインが笑いこらえてる。メッチャ肩フルフルいってるよ。

これから起じる」と考へてるのかな？

俺も考へてみる。

考へてみる。

考へ

「ブフツツー！」

「ー？」

「な、なんだーー？」

「い、いきなりどうしたのー!？」

おっと、堪えきれなくて吹いてしまったようだ。

牛乳飲んでたらやばい」とになつてたな。

主に鼻の中が。

「いや、外で起しつづけてる」ことが、な

「?外で何か起きてるんですか?」

「いや、街の中入つたら話すよ」

「?どうですか」

どうやら皆興味が無いらしく、そのままガールズトークにもせりつていった。

・・・外の会話聞いてたのは決して現実逃避のためじゃないからな?
・・・ホントだぜ?

気を取り直して。

「その紋章がどう……しつた……？」

「お返づきになられましたか？」

「ツ！？」「

メツチャロパクパク言つてゐぜ。

ପାତ୍ରି

しかも何かだんだん顔が青くなつて・・・あ、白くなつてきた。

やば、おもしけつ！

「おー、大丈夫か？」

「・・・つーは、はーつーも、申し訳ありませんでした！」

おお、90度！

あんな重ねつた鎧でよくあわじで曲がるもんだな。

てか、不可能じゃね？

まあ、俺だったら根性でどうとかするがな。

お？ 敬礼したぞ？

「い、今までの」無礼お許しぐだれーー自分の浅はかさを思い知りました！」

「まあ、それは今はいいでしょ！」

「それより中に入ってくれんか？」

「は、はーーただいまーま」と申し訳あつませんー。」

お?

やつと街の中に入れるか。

ふう、意外と長かったな。

いよいよ、街に入れるぜ！

まだ中に入れないの？（後書き）

？

何か違和感？

・・・まあいつか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8807w/>

技を極めし者なり

2011年10月9日22時58分発行